

戦後会計学の軌跡と反省

経済貿易研究所主催
2013年11月20日（水）14：20～16：40
神奈川大学 1号館 5階501号室

座談会出席者：田中 弘（経済学部教授）
岡村勝義（経済学部教授）
奥山 茂（経済学部教授）
戸田龍介（経済学部教授）（司会）
的場昭弘（経済貿易研究所長）
山口拓美（経済貿易研究所常任委員）

研究所長あいさつ

【司会（戸田）】では、座談会の開始にあたりまして、経済貿易研究所長の的場先生から一言ぜひいただきたいと思います。

【経済貿易研究所長 的場昭弘】毎年恒例のことになっているんですけれども、経済貿易研究所として、神奈川大学の経済学の学問の歴史を残したいというのが趣旨で、このような企画を始めました。今

年で3回目になりますが、定年でお辞めになる先生方の学問的な蓄積を後輩たちに残すのが基本的な役割です。

田中先生は会計学の中でも非常に有名な方で、私のように会計学と全く関係ない素人も、田中先生のお名前は存じ上げておるといような有名な方があります。特にアングロサクソン型の会計制度に対して反対をされて、それまで私も会計というものを単なる実務なのかなと思っていたんですけれども、会計というものにそれぞれの国の価値観なり経済力なり風土なりを反映することが必要だということを主張されて、日本的な会計制度というか、それぞれの国の風土に合った会計、そのような意味では、私どものようなマルクス経済学をやっている人間にとっても、それぞれの国の価値観というか、そういうものを反映する必要があるということで、非常に分かりやすいと思っています。

あれは新潮新書（『時価会計不況』）ですか、出されたとき、それから『文藝春秋』に確か論文を出さ



（的場昭弘氏）



れたとき、もう5、6年前に論議になったとき、そのときに私もお名前を存じ上げまして、神奈川大学に大変素晴らしい先生がいらっしゃるということで、誇りに思った次第であります。

しかしながら、定年という制度は厳しいものでありまして、田中先生もそろそろお辞めになるということで、ぜひ、後輩のわれわれに何か一言残していただきたいということで、今日の座談会を企画いたしました。よろしく願いいたします。

【田中】 ありがとうございます。

会計学との出会い

【司会（戸田）】 それでは、2時間ぐらいということでよろしいでしょうか。今、2時20分ぐらいですので、4時半ぐらいをめぐりにお話をいろいろお伺いしたいと思います。既に田中先生から少し案もいただいておりますが、取りあえず3部構成でいろいろお話を聞いていきたいと思っております。1つは研究前史と言いまししょうか、先生がなぜ会計学を選ばれたのか、あるいは大学教員になられたのか、あるいは大学教員になってよかったと思うことをお伺いしたいと思います。あと、もし大学の教員以外なら何をしたかったのかという、ちょっと身近なお話もお伺えたらと思います。

今度、神奈川大学の教員をご退職ということなので、神大20年でしょうか、先生は。

【田中】 20年ちょうどですね。

【司会（戸田）】 20年間を振り返られてというようなことを第1部と考えております。

第2部が、この会の論題の名前にもなっておりま

すけれども、「戦後会計学の軌跡と反省」ということで、田中会計学というものについてぜひお伺いしたいと思います。また、先生が考えられる会計、ないしそもそも会計学とはという、ちょっと本質的なところもお聞きしたいと思います。そこでわれわれも少し学問的な質問、私なんかだと、先生がなぜ早い時期から取得原価が正しいというふうにあれだけ確信を持たれたのかとか、そういったことをお聞きしたいと思っております。

最後のところで、われわれすべてに伝えておかねばということ、先生にお伝えしていただきたいというふう考えております。

それでは、まずは研究前史というか、第1部なんですけれども、2部の本格的な議論の前に肩慣らしということで、まず、先生はなぜ会計学を選ばれたのか、なぜ大学の教員になられたのか、ここからお聞きしたいと思っております。

【田中】 ありがとうございます。たまたま3回目の座談会ということですが、同じ学問領域の人だけの座談会というのは初めてなんですよね。今まで研究領域がみんなばらばらで、要するに定年退職する方に合わせ座談会をやってきましたから、退職される方が3人いたら、その3人で座談会をやってきましたですよ。

たまたま今回は退職者が私ともう1人の方なんです。たまたまこういうふう会計だけでもって座談会というのを経済貿易研究所の山口拓美先生あたりが企画していただいたので、話は非常にやりやすいというのものあるんですけども、専門外の人にしてみれば、面白くないかもしれません。

会計学との出会いというのは、実は先生方にもそれぞれの出会いというのがあるんだと思うんですが、私は結構若いときなんです。私、高校は商業高校に行ったんですね。商業高校の2年生のときに、実は太田哲三先生に会っているんですよ。私の高校の校長先生が朝倉和夫先生という会計学者だったんですね。その先生が太田哲三先生と親しかったらしくて、高校2年のときに太田哲三先生を講演に呼んでくださったんです。

太田先生の話聞いて、それがすぐ会計学の道につながったという意味ではなかったんですけど

も、ともかくそのときは、会計という学問があるんだというぐらいのことだったんだと思います。高校3年のときに会計学を勉強して、大学に入って、最初に大学でお会いた先生が、何と管理会計の青木茂男先生だったのです。10分ほど話をする機会があって、青木先生から「君は何を大学で勉強するのかね」って聞かれて、「会計学をやりたいと思っているんです」と答えたんです。

私は相手が青木先生だって知りませんから気楽に言えたんですね。理由を訊かれたので、高校で工業簿記や会計学を学んだけど受験で十分な勉強ができなかったからだということを話したんです。そうしたら、青木先生はすごく喜んで、「会計学は面白いから一生懸命やりなさい」なんていう話をしてくれたのを覚えているんですよ。

実はその後、会計学で一番感動を受けたのは、私の恩師であった佐藤孝一先生の講義でした。教卓が自分の汗でぐしゃぐしゃになるぐらいの熱弁の講義を聞いていて、会計というのはこれだけ熱を入れられる学問なんだと思いました。中身はよく知らないですよ。中身は知らないけれども、これだけ熱中できる学問なんだということにちょっと心を打たれました。

私が一番嫌いな職業が学校の教師だったんですよ。だから、学校の教員になるつもりは全くなかったんですけども、ちょうど私が卒業するのが昭和41年で、まさに学生運動の真っ盛りなときで、大学は紛争に明け暮れていて、というときに就職活動をしなればいけなかったんですけども、あのころ学園紛争をやっている大学に対しては、どこの会社もみんな就職お断りの看板が掛かっていたんですね。私自身も大学4年間で勉強した記憶がほとんどないし、ほとんどアルバイトで暮らしていたということもあるので、これは卒業しても何もできないという気持ちがあって、それで大学院に行こうと思ったんですよ。

大学院に行くときに、あれだけ熱烈な講義を聞いていますから、佐藤先生のところがいいと思って、佐藤先生のところに行ったんですね。あのころは早稲田の商学研究科は定員が1学年110名の時代だったんですよ。2学年合わせて220名、ドクターを合

わせると300人の大所帯の大学院だったんですね。

その中で、ともかく会計学を勉強しようと思ったから、染谷先生とか、青木先生ももちろんそうですけども、有名な先生がずらーっとそろっている。それぞれの先生に全く違う領域の会計学を教えてもらいながら、そういう意味ではだんだんだんだん自分としてみたら、もうちょっと会計学を勉強したいなという気持ちになって、マスターが終わったときに、これは本当に何となくですけれども、ドクターコースに行っちゃったら、就職の道が思い切り閉ざされていて、一番なりたくなかった学校の教員しかなかったという笑えない話です。(笑)

私、会計学の出会ひの中で一番よかったと思うのは、佐藤孝一先生との出会ひかなと思うんですよ。一番インフルエンスを受けたのは、新井清光先生だと思うんですね。プラスの面でも強い影響、いい面でも受けましたし、悪い面でも非常に強い影響を受けた記憶があります。そんなところで、まず第1段階は。

【岡村】 ちょっとお聞きしてよろしいですか。ほかの人も分からないと思うので、先生は早稲田大学に入ったということですよ。早稲田大学でゼミナールは3年から始まったということですか。佐藤孝一先生の授業を受けられたのは。

【田中】 佐藤先生の講義は2年生の会計学ですね。

【岡村】 それきっかけで佐藤孝一先生のゼミにお入りになったのですか。

【田中】 いや、私、さっき言いましたけれども、アルバイトに明け暮れている学生ですから、学部時代ゼミなんか入っていないんですよ。



(岡村勝義氏)

【岡村】ゼミに所属しないで。

【田中】そうです。それでも面白かったですね。あのころは各先生方はフレンドリーで、直接研究室へ行って、いろいろな話を聞いても結構対応してくれたというところがあったので、いろいろな先生方のところに顔を出して、論文を読ませてもらったり、抜き刷りなんかもいっぱいもらったりしていました。

【岡村】会計学の授業としては佐藤先生の授業を受けられて、それ以外の先生方の授業は。

【田中】もうほとんどの先生の講義を受けましたよ。

【岡村】そうですか。学部のとときにですね。

【田中】青木先生の前価計算論、管理会計。染谷先生の財務会計論、資金会計論。新井先生はそのころまだ簿記論かなんかしか持っていなかったんですけど。あと、石塚先生の外書購読とか、大体ほとんどの先生方の授業は受ける機会がありましたね。

就職難から大学院へ

【岡村】大学院に入られるきっかけになったのは何ですか。

【田中】就職難ですね。(笑)

【岡村】非常にはっきりしていますね。(笑)

【田中】よくうちの子供たちからも、なんで大学の先生になったのということを聞かれるんですけど、答えはただ1つですよ。大学を出るときに就職できなかったからと。あれだけ就職難の時代というと、今よりも厳しかったと思うんですよ。会社の看板に「早稲田大学お断り」って書いてありましたから。(笑)

【岡村】今のお話を聞くと、大体、先生の大学生気質というか、それが理解できるような感じがします。司会にバトンをお返しします。

【司会(戸田)】ありがとうございます。それでは次に、大学教員になってよかったと思うことをお聞きしたいと思います。

【田中】大学院が終わって、すぐ名古屋の愛知学院大学というところの教員になったんです。なぜ愛知学院大学かということなんですけれども、そのころはまだ幾つかの大学が教員を募集している時期だっ

たので、選ぶことはできたんですね。

愛知学院大学へ

【田中】ただ選ぶことはできたんですけども、私は貧乏学生でしたから、一番給料のいい大学がいいだろうと。(笑) あちこちの大学を調べていったら、愛知学院が図抜けて給料が高いんですよ。それから愛知学院に入るためのコネを探して、何とか見つけて、愛知学院の先生方とコンタクトを取って、よく知っている先輩が1人既に就職していたこともあったので、その先生を頼りにして何とか潜り込んだんですけれども、確かに給料がいいんですよ。私にしては、毎月使い切れないぐらいに給料をもらうんですね。

そのうちにボーナスなんかもらうじゃないですか。赴任したばかりの6月にボーナスをもらうんですけども、4月はほとんど授業をやっていない。5月はゴールデンウィークであまり授業をやっていない。ほとんど何も仕事をしていないとき、6月にほんとボーナスをもらったときにはびっくりして、こんなにもらっているんだろうかと思うぐらい頂いたんですが、それから何年か、5年かそこら、預金通帳の残高がどんどんどんどん増えていくんですよ。私はお金を使うことはほとんどないので、どんどんどんどん増えていくので、こんなにもらっているのかなとずっと思っていたんですが、それは結婚するまででした。結婚してしばらくしたら、きれいになっていました。(笑)

学校の教員というのが嫌だと言っていたのは、中学や高校に嫌な教師がいっぱいいたからだったんですね。その嫌な教師みたいにはなりたくないということで、学校の教員が嫌だということに気が付いてからは、何だ、ああいう先生にならなければいいのかと考えました。なれるかどうか分からないんですけども、そういう嫌だったと思う先生を反面教師にして、自分が好きだと思えるような先生になれればいいのかなと思って、少し反省しまして、何とか少しずつ努力したつもりです。

そのうちに学校の教師のいいところは、何せ周りにいつも若い学生がいることだということに気がつきました。そのころはまだ私も若かったんですけど

ども、学生が誰も私のことを先生なんて呼ばないんですよ。先輩、先輩ってしばらくの間呼んでいて、はっと気が付いて先生と呼び直すような、そういう非常にフレンドリーな関係を続けられたというのがすごくよかったかなと思います。

時価会計との出会い

【田中】 それと、研究面では拘束がほとんどなかった。この点では、私の恩師であった佐藤先生が早く亡くなられたことが1つ大きいかもしれないですね。お師匠さんが何も言わなくなっちゃった。それで、お師匠さんに代わる人たちはいるんですけども、その先輩方からも、ああしろ、こうしろ、こんなことをやってはいけない、ああいうことはやってはいけないというのはあまり言われなかったので、比較的好きな勉強ができました。

研究テーマも、私、今から思うと不思議かもしれないんですが、修士論文のテーマはアメリカの価格変動会計論なんですよ。つまり時価会計だったんです。アメリカの時価会計の研究をやって、結論的にそこで出したのは、今読んでも面白いと思うんですね。原価主義会計の枠の中での時価主義というのを結論として出しているんですよ。

例えば、後入先出法を使うような話ですよ。あのころだったら、投資有価証券みたいなのはなかったし、ほとんど価格が変動するのは棚卸資産だったということもあって、棚卸資産のいわゆる売上原価の計算で、時価会計的な発想を取れるものとするとならば後入先出法だろうというので、後入先出法をメインの研究テーマにして、原価主義会計の枠の中で時価会計をうまく取り込んだらどうかというようなペーパーを書いたんですね。

それがずっと引っ掛かっていて、しばらくしてから、アメリカあたりから時価的な発想の考え方、エドワーズ・ベルみたいな考え方、あるいはオーストラリアからチェンバースみたいな考え方が入り込んできたときに、そういう考え方はどちらかというとならば原価主義の枠内ではなくて、原価主義を取っ払って、新しく時価会計を構築しようとする、そういう考え方だったのかなと思うので、それについてはかなり懐疑的なところがあったんですよ。

その懐疑的なところだけでも、まだ大学院生、ドクターコースの学生ですから、あまり偉そうなことは言えなかったんですけども、でも頭の中にはずっとそれがあって、いつかこれについて書いてみたいなという思いがずっとあって、それで大学の教員になってしばらくしてから、エドワーズ・ベルの批判を書くようになったんですね。

エドワーズもベルももともと会計学者ではないから、やむを得ないところもあるのかもしれないですけども、いわゆる多元評価論では会計はできないと思ったのです。情報会計はできるかもしれないけれども、決算はできないというような思いがあって、時価を使うとどういうことになるのかとずっと考えていたのが、時価主義会計を批判するベースになっていたんじゃないかなと思うんです。ですから、修士論文のテーマが依然として今につながっているところがあるのかなという思いはありますね。

【司会（戸田）】 研究は修士論文に帰っていくというような説もありますけれども。

【岡村】 またいいですか。修論をお書きになったのは、何年ごろですか。大学院に入ったころというわけですよ。修士課程が終わったころですから。

【田中】 44年ですね。

【岡村】 昭和44年ですか。

【田中】 大学を41年に卒業して修士に入っていますから、3年生のときだったんですよ。私、修士課程を3年やっているのだから、44年のときに書いたものですね。

イギリス会計との出会い

【岡村】 それからドクターコースに入って、愛知学院に奉職されて、愛知学院の中でもそういう研究を基本的には行われていたのですか。

【田中】 愛知学院に入るときに、たまたまなんですが、新井先生から、あるイギリスの本を読んで、これをまとめてペーパーにしろと言われてたんですよ。私1人じゃなくて、あの当時は原光世先生と一緒にやるように言われて、それでイギリスの文献を読んだんですけど、これが難解なんですよ。それまでずっとアメリカの会計の文献を読んでいて、アメリカの会計の文献というのは比較的やさしいですから、

特別苦勞はしなかったんですけども、イギリスの文献を読んだ途端にまるで分からないという、文学書を読んでいるような、あるいは哲学書を読んでいるような雰囲気なんです。イギリス人の英語というのは、そういう英語なんです。

それをまず悪戦苦闘しながら、何とか原先生と2人でペーパーにまとめて出してみたら、結構面白かったんです。やったテーマが。それで原さんと2人で、イギリスの会計をやっている学者は極めて少ないから、下手にアメリカをやるととんでもない世界に入っちゃうし、原先生は第2外国語がフランス語、私はドイツ語じゃないですか。ドイツもフランスもたくさん学者がいるから、じゃ、イギリスでやろうかという話になって、イギリスの会計をある程度10年ぐらいやってみようかという話をして、イギリスの会計をやってみたら、いろいろな面で面白かった。

第1は、イギリスは日本と経済力とか国土とか似ているんですね。中小企業の国じゃないですか、イギリスも日本も。その点もよく似ているし、法律でいうと、商法、会社法があって、会計基準があってという、この階層もよく似ているし。

似ているって、後から気が付いたら当たり前なんですよ。イギリスのいわゆる直接金融を背景にした会計制度がアメリカに移って、それが日本に来たんですから、よく似ているのは当たり前なんですけど、しばらくしているうちに、イギリスの会計が私たちの会計の源流なんだということに気が付いてから、源流だったら、日本の会計とイギリスの会計が今どういう違いになっているのか、あるいはイギ

リスから学ぶことがあるんじゃないか。

日本から輸出することがあるかどうかは分かりませんが、イギリスの会計を、今風の言葉でいうと座標軸にして、日本の会計を評価することができるんじゃないかという、ちょっと大それた思いがありまして、結局それから20年間イギリスの会計の研究をやっちゃったという、そういう経緯があるんです。

【岡村】 戦後会計学じゃなくて、田中会計学の軌跡を聞いているようなものですね。

【田中】 田中会計学、そんなものないです。(笑)

染谷恭次郎先生の会計観

【奥山】 1ついいですか。先ほどのお話の中で、取得原価の枠組みの中で時価会計を考えるという着想を得られたそのきっかけになった文献が何かあったんですか。

【田中】 エドワーズとベルの本を読んでいて、すごくうさんくささを感じるんですよ。こんなの会計じゃないんじゃないかなという、そういううさんくささを感じるのと、もう一方で、原価主義の誰かを読んだわけではないんですけども、監査論の先生方の話をいっぱい聞いていると、時価は監査できないということを監査論の先生方はおっしゃるんですね。

会計士じゃなくて、監査論の先生方からは時価を使うと監査ができないから大変だよという話を聞いていて、じゃあ会計って一体何なんだろうということ、結構その時期いろいろな方に話を聞いていると、染谷恭次郎先生の話が一番影響があったのかもしれないですね。染谷先生が財務会計論という授業の中でよく言われたのは、お金を、資金を預かる経営者の責任って何なんだろうと。会計責任ですけどね。そのときは預かったお金、つまり投資をいかに大きくするかというよりも、投資をどう使ったかの報告をすることだということを染谷先生が言われたんですよ。

でも、資金を大きくできたらもちろんいいんですけども、大きくする、あるいは小さくなるかもしれないんだけど、染谷先生は、そのときにどういう経緯でもって大きくなったか、どういう経緯を



(奥山茂氏)

経て小さくなったかの記録を残しておかないと、経営者として責任を果たせないでしょうという話を盛んにされていて、特に年度決算をやっている以上は、1年目の経営者の責任は、同じ経営者が2年目を経営するにしても、2年目の経営者の責任と違うだろうというのです。

1年目と2年目では株主が代わっていますから、1年ごとに経営者が資金受託者としての会計責任を果たしていかなければいけないだろうというとき、1年目の経営者の責任というのは、受け入れた資本をどう使って、最終的にどうなったのかを明らかにするために、今の言葉でいうと、投下資本の回収計算を期間でやる必要があるのですね。投下資本の回収計算をやっていて、回収余剰が出たら利益とするという、いわゆる原価主義会計の考え方をそういう表現で言われたのかなと思うんですよ。それが私にしてみたら会計の大枠を決めた話、今から思えばですけれどもね。時価主義というのはそのころからうさんくさいなという思いはありましたね。

【岡村】 そういううさんくさいのが反面教師になって、原価主義がよろしいんだと、そういう理屈に。(笑)

【田中】 2つしかないというと、よく時価主義を否定すると原価主義しか残ってなくて、原価主義を否定すると時価主義しか残ってなくてという、それについて、私も二者択一の世界じゃないんじゃないかなという思いもあって、十何年前でしたか、広瀬義州先生や平松一夫先生、浜本道正先生、北村敬子先生、商法の岸田雅雄先生などと、取得原価主義会計の科研費の研究会をつくって、2年間ほど原価主義の研究をやったんですね。

そのときの結論も、原価主義を現状でいいと思っている人はいないので、いかに原価主義会計を強化するかという、その研究をするべきだという話を、最後の結論的なところで研究会としては出したんです。どんな制度でも完全なものはないというふうに考えていかないと、じゃあ原価主義は駄目だからといって、時価主義に移ったら、時価主義は別の問題がいっぱい出てくるじゃないですか。

そういう意味では、どちらの方法を取ったほうがいいというのではなくて、私は原価主義の立場に立



(田中弘氏)

ったら、原価主義に問題点があることを認識して、それをいかに強化するかということの研究するのが学者の1つの仕事じゃないかなと思いましたね。

アカウントビリティと原価主義会計

【岡村】 その1つの支持理由というのは、染谷先生が言われていたアカウントビリティというのが、原価主義の場合にはよりよく保てる、達成できるという、そういう観点が基本的にはあったということですか。

【田中】 そうですね。時価主義による財務諸表はどちらかというと、特定の経営者の経営能力を示すものじゃなくて、誰でもいいわけですよ。

例えば時価によるトヨタ自動車の財務諸表を見せられたとしたら、トヨタ自動車がどれだけの財産を持っているかはわかるにしても、トヨタの経営者がどれだけ頑張ったかとか業績を上げたかなんということは読めないですよ。ましてや次の期にどれだけの業績を上げるかなんていうことはまったく読めないですね。

それが原価主義で作られた財務諸表だと、トヨタの経営者がこれだけの資金を受け入れて、これだけ資金をこういうふう运用到して、結果これだけの利益を出したんだという、経営者の能力まで全部財務諸表に表れてくるじゃないですか。これまで経営者がやってきたことだけではなくて、これから何をしようとしているかも読めます。それが原価主義の財務諸表だと思うんですよ。

それを全部時価にしてしまったら経営者の能力も企業の将来性も成長性も読めません。わかるのは、

その会社がどれだけの資産を持っているかだけです。それも、売れるはずのない時価を使っているのですから、投資家をミスリードしかねないですね。

イギリス会計から学んだこと

【岡村】 イギリスを中心にした研究が20年間ぐらいずっと行われてきて、ちょうど2000年の前後ぐらいから今のテーマが変わってくるという、そういう感じですか。

【田中】 しばらくの間、イギリスの会計をやって、本を何冊か出した後、イギリスの会計をそのまま続けていくのも1つの手なんですよ。でも、私にしてみたら、その後にイギリスの会計を研究する若い研究者の方々がある程度出てきたので、これは私がいつまでも居座っているよりは、若い人にやってもらったほうがいいなという思いもあって、ある意味ではそこでイギリスから離れたんですよ。

イギリスから離れてみると、イギリスに特化して研究している間に、やりたいことがいっぱいあったのをやらずに来ていますから、だったらやりたいことをやったほうがいいかなと思ったのが、その時期です。西川先生に呼ばれて神奈川大学に来たんですよ。

【岡村】 それは給料がよかったから？（笑）

【田中】 給料はびっくりするぐらい下がっていました。（笑）これは少し大きい声で、理事長に聞こえるように。（笑）

【岡村】 もうちょっとお聞きしたいんですけど、イギリスの場合にはどちらかという、アカウントビリティーというのはかなり根強いところから出てきますよね。会社法にしても、そういう基盤があって、そこから時価会計を見ていくというようなものが、潜在的には先生の中にあるんですか。

【田中】 イギリスはちょっと面白い国で、損益計算は原価主義なんですよ。貸借対照は時価主義なんですよ、発想が。つまり貸借対照表の不動産あたりが、あまり時価から離れるのは投資家にとってもあまり好ましくないから、こっちは時価で見せようとするのです。バランスシートは時価で乗っけるけど、評価益はどうするのという話が出てくるんです

けれども、これは未実現だから損益計算書には出さないという発想です。

剰余金計算書みたいな、イギリスの第3の計算書というのは、損益計算書にまだ回せないものは1回ここに預かっておくという、それがもし売却して実現したら、損益計算書に戻すという、考えです。

そういう会計をやってきたのを見てきて、これはなかなか実学だなと思いました。投資家が欲しい情報が両方出ているわけですよ、うまい具合に。理論的な整合性はないかもしれないですよ。要するに複式簿記から出てくるデータを、バランスシート、損益計算書にぱっときれいに分けるといって、そういう発想じゃなくて、分け切れないものは第3の計算書を置いておいて、そこにしばらく入れておくんだという発想は、これは実学的な発想なんだなと思います。

イギリス人は空理空論を嫌うだけではなく、体系的に美しいとか論理的に組み立てられているということに価値を置かないというか、胡散臭さを感じるようで、実際に使えるかどうかを重視しているように感じますね。学問というよりは発想なんだと思います。

それに比べると今の私たちは、国際会計基準なんかみんなそうですけれども、そこをどっちかという無理やり右と左に分けちゃって、全部バランスシートか損益計算書かどっちかに全部無理やり入れようとする。そうすると、その他の包括利益みたいな変なものが出てくるんじゃないかなと思います。そういう意味では、いい勉強をさせてもらったなと思うんですよ。イギリスからいろいろなことを学んだ中でも、その中でも、投資家が必要としている情報をどういう形で出すかという、1つのアイデアだったのかなと思うんですけどね。

【岡村】 お聞きした理由は、アカウントビリティーがイギリスの会計のある部分に強く残っていて、それで原価主義を支持するというところに、もしなるとすると、イギリスというのは面白い国で、先生が言われたように、そういうアカウントビリティーを基本に据えながらも、時価を積極的に取り入れて財務報告をしているわけですよ。そういう部分について、何か先生はギャップを感じなかったのかなと

いう、そういう気持ちを持って聞いたんですけども、むしろそれが非常に実学的だと認識できたというわけですね。

カーズバーグ教授とブロミチ教授のこと

【田中】 私はイギリスに2回行かせてもらったんですけども、最初に行ったのが1984年から85年で、ちょうど英語圏というか、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、この辺の国々に時価会計の嵐が吹き荒れた直後に行ったんですね、イギリスに。

ロンドン大学にはつてがなかったので、ロンドン大学に誰かいないかなと思ったら、管理会計のデブ先生と、財務会計がカーズバーグさんという方がいるぐらいで、誰がほかにいるか分からなかったら、カーズバーグさんに取りあえず手紙を書いたんですよ。インビテーション（招聘状）をもらったのはいいんですけども、カーズバーグさんという人がどういいうペーパーを書いているか、一度も読んだことがなかったんですよ。

書いた本がなかったから読みようがなかったんですけど。それでロンドン大学に行って、最初に会って、しばらく話しているうちに気が付いたのは、彼は時価主義者なんですよ。（笑）

それで、私はそのときに特別に反論したわけではないんですけども、イギリスの会計学者というと、ほかには誰か知っているかというから、あのころはエジンバラ大学に同じ時価主義者のスタンプ教授がいましたから、スタンプの名前を挙げたら、顔色が変わるんですよ。仲が悪いんだと分かりました。（笑）

しばらく授業に出ていたんですけども、向こうも何となく私が時価主義を信じていないところが分かるらしくて、いつも時価主義のいいところをピックアップして教室で話すのを聞いていて、これは宗教じゃないんだから、時価主義のいいところばかり言うんじゃないかと、学者なら批判的な目でも話してくれたらいいのになんて、1回目の留学はそんなものだったんですよ。

2回目の在外研究は、13年前、神奈川大学から行かせてもらいました。同じロンドン大学に受け入れ

ていただいたのですが、受け入れ教授がブロミチ教授で、京都の研究会でお会いしたこともあって、歓迎していただきました。

ちょうど2000年のときで、それこそ国際会計基準が力を持ってきはじめたときのロンドンにいましたから、ヨーロッパから来る先生方もいろいろ国際会計基準をテーマにした研究報告なんかされるんですけども、2000年というと、まだ現実味がないんですね。ヨーロッパが採用するのは2005年じゃないですか。2000年というと、国際会計基準を使うか使わないかの議論をやっている、それほど現実味がない。

1984年に最初にイギリスに行ったとき、実は国際会計基準をイギリスは使っていたんですよ。もう既にIASはありましたから、ロンドンの証券取引所にイエローブックというルールブックがあるんですけども、そのイエローブックの中に、外国の、イギリスですから、イギリス以外の外国の会社が国際会計基準に従って財務諸表を作ったものはイギリスの基準で作ったものと同等なものとして受け入れると書いてあるんです。

それを何年間か受け入れて、しばらくしてから、ここは駄目だ、あそこは駄目だって条件を付けてくるんですけども、10年近くの間、受け入れていたんですね。その最後のほうになってから、やっぱり国際会計基準の中身がイギリスにどんどんどんどん合わなくなってきて、結局使用禁止になったということがありました。

ですから、国際会計基準って単なる作文だったわけではなくて、しばらくの間、少なくともイギリスでは使っていたという時代があったんですね。でも、そのころの国際会計基準というのは、いわゆる資産負債アプローチではなくて、収益費用アプローチで作られたものですから、特別イギリスの会計でも、アメリカの会計でも、違和感のない会計が国際会計基準だったんですね。

ウインブルドンのこと

【田中】 たまたま留学の話を見せていただいたんですね。もともとイギリスを選んだのは、研究テーマの選択上、イギリスを選んだんですけど、何を学ん

だかというとは非常に微妙でして、昔はインターネットの時代ではないですから、確かに文献を手に入れるのは結構面倒くさかったものもあるんですが、行ってみてびっくりしたのは、日本では手に入らないものがいっぱい普通の本屋さんで並んでいる。

日本でも、日本書籍やなんかいろいろ外国語文献を紹介してくれるじゃないですか。パンフレットに載って紹介してくれるけど、そんなところに全然出てこない文献というのがいっぱいあって、それが結構読まれている。こういうものが読まれるんだということに気が付いたのと、比較的そういう読まれているものというのは、時代を描いているというんですか、粉飾決算を暴いてみせるようなものがたくさん出版されているのです。

帳簿に手を加えるのを cook (料理する)、粉飾まがいはいは well-done、元の形がなくなるまでこんがり焼くのを roast というそうで、帳簿が操作されているような話を具体的に書いた本とか。それから、イギリスの監視機構がいかに役に立たないかを書いた本とかというのが結構、日本にいと分らないのが、向こうに行くと比較的読まれている本なので、手に入りやすかったというのがありますよね。

それでも、最初に行ったときは家内と2人だったので、しかも住んだところがウインブルドンという。(笑) ウインブルドンのセンターコートまで歩いて2分ぐらいのところフラットを借りていましたから、どちらかという遊びに行ったところがあるんですけども、2回目のときは子供たちが一緒だったので、そんなに遊んでばかりもいられなくて、どちらかという子供たち中心の留学でした。それはそれなりによかったのは、向こうの家庭生活とか、学校生活とか、学校での勉強の仕方なんかよく目にすることができたので、その点ではよかったなと思います。

それと向こうに行って、いろいろな人と知り合っているうちに、イギリス人というのは、どちらかという地球という世界でいうと、長男坊なんですね。どんなときも嫌な顔をしない。誰に対してもフレンドリー。本心は知りませんよ。本心は知らないけれども、誰に対してもフレンドリー。

ちょっとおせっかいなぐらいまで、他人に対して

面倒を見てくれるというのはよかったし、それは日本に帰ってきてからも、自分もあなりたいなという思いもあって、学生にはできるだけそういうふうな接してきたつもりなんですけど、長続きはしないですね。(笑)

【岡村】 2回目の留学のときに、いわゆる市販されている本で、日本には紹介されていないような、そういう会計に関係する本が結構出版されているのが分かったと。

【田中】 それは1回目なんですよ。

『原点復帰の会計学』

【岡村】 1回目ですか。そういうものが潜在的にあって。実は、先生がそういう内容の形の本を出されたのは『会計学の座標軸』ですよ。あれはちょうど2000年に入ってますよね。そういうことで、2回目というふうにならなくて今、錯覚をして聞いていたんですけど。

【田中】 『会計学の座標軸』という本を出したとき、実は出版社との間にいろいろやり取りがありました、というか、その前に出したのが、『原点復帰の会計学』だったんですね。あれは中央経済社からの依頼原稿だったんですよ、本当は。『時価主義を考える』、あれも中央経済社からの依頼原稿だったんですよ。中央経済社に私が言ったのは、教科書ばかり作っていないで、世の中に提言する本とか、あるいは出版社としての財産になるような本を出したらどうかという話でした。若いから言えたのかもしれませんが、そうしたら当時の編集長が、だったら1冊か2冊モデルの本を書いてくださいという話になって、それで『時価主義を考える』を書いて、その後で『原点復帰の会計学』を書いたんですよ。

そうしたら、『時価主義を考える』を出した後、出版社に一部からかなり圧力が掛かったみたいなんですね。要するにこういうものは中央経済社あたりで出す本ではないだろうという圧力が掛かって、その次の『原点復帰の会計学』の原稿を取りまとめ、さあ渡すという段階になってから、「出版できません」と言ってきたんですよ。そんなことがあって、出版できませんと言われたらしょうがないですから。

そのころは、税務経理協会との仕事もいっぱいいろいろやっていて、税務経理協会の大坪社長がうちからも本を出してくださいよという話をしていたので、もうやむを得ないから、事情を話して、向こうから断られたけど、税務経理協会から出版させてもらえないかという話を持って行って、そうしたら非常に快く引き受けてくれたんですよ。快く引き受けてくれたのが1つのきっかけで、じゃあ、しばらくこの会社から、今でこそ偉そうに言えるんですけども、ある程度売れる本を出そう、出版社に迷惑を掛けられないぞという気持ちになりました。

『会計学の座標軸』

【田中】 2回イギリスに行かせてもらったんですけども、2度目のイギリスに行っている間に、外国にいて日本のことが客観的に見えるじゃないですか。外国にいて、日本を客観的に見たらこういう姿だったなと思うのを、ずっとある程度まとめて書いていくんですけども、これも発表の場がないと書き続けられないですよ。

それで、『税経通信』という雑誌に書きたいから、何本か出してくれと言ったら、同じ人からの原稿というのは大体年に3本ぐらいですって言うから、分かったと。じゃあ、一応3本全部預けるから、もうそのころはメールに添付して原稿を送りましたから、3本分送っておいたんですよ。そうしたら編集部が原稿を持っているということは、誰かに頼む必要がないから楽ですよ。続けて3本出してくれたんですよ。

そうしたら原稿がなくなるじゃないですか。原稿がなくなったから、また出していいかと聞いたら、どうぞ、いいですよと言うから、また3本ぐらい送っておいたんですよ。結局あのときに5、6本原稿を出させてもらったのが本になって、帰ってきたときにちょうど出版できたというのが、あれが『会計学の座標軸』という本です。

【司会（戸田）】 最初の『時価主義を考える』というのを中央経済社で出されて、それでいろいろ圧力が掛かってということですけども、それは時価主義を批判するみたいなことは駄目と言われたのか、それともそういうはっきりした物言いをしてはいか

んとか、どういうことだったんでしょうか。

【田中】 どっちも当たっているんですよ。出版社の性格からして、保守的な会社というイメージなんですよね。世の中、現在動いている現行制度を批判するのも駄目だし、これから向かおうとしているものにくぎを刺すのも駄目だという、そういう発想なんですよ。

それが私の文章というのは、どちらかというところがいいところがあるというか、一般向けに書きますから、学者向けではないので。そうすると、主張はストレートに伝わっちゃうんですよ。それをウエルカムだと言う人もいるけれども、こんなにはっきり物を言っただけは困るんだよねという人たちもいるんですよ。中には「そういうことを言うのは君じゃなくて、私だよ」という人もいますよ。（笑）だったらあなたが書いてよって言いたかったですけど、若造の私ができることではないですよ。

私が「企業会計原則の法的認知」というテーマで学会報告をしたら、「そういうことを言うのは君じゃないんだよ、私たちなんだよ」という老人教授がいるんですよ。だったら先生、言ってくださいよって言いたかったけど、言えなかったですけどね。『時価主義を考える』もそうですよ。そういうことを言うのは、おまえみたいな若造じゃないんだと、経験を積んで、学会の重鎮となった人間が言うべき話なんだというんです。だったら言ってくださいよと思いましたけどね。

司馬遼太郎氏に学ぶ

【岡村】 そういう『時価主義を考える』という本を出版するときの、何か強い動機というのは、それまでの書き方とだいぶ違いますよね。

【田中】 違いますね。

【岡村】 スタイルが全く変わりましたよね、先生のね。

【田中】 なぜでしょう。（笑）

【岡村】 それを聞きたいと思って。それは1984年のイギリスの1回目の留学のときに、そういう似たような種類の本がイギリスでは一般に出版されていたという事情が分かって、日本ではどうしてそういう本が出版されないんだろうかと、そういう疑問が。

【田中】 1つはそれなんです。イギリスで読みたいものがないんですね。日本の会計学者が書く本というのはやっぱり硬い。学者向けとか仲間向けに書いている。ところが向こうで気が付いたのは、そういう本ではなくて、一般社会人向けに会計問題を堂々と議論している、あるいは弁護士なんかが会計問題を議論している、それが一般向けに書かれている。やっぱり一般向けに書くというのも大事なんだなと思って。

何人かの方から言われたことは、本を出すことはいいけれども、売れるということが大事だと。売れて初めて自分の意見が世の中に伝わるんだと言われて、売れるような内容に、売れるようなものにならなければいけないんだというのが1つです。

もう1つは、あちこちで言っちゃっているからもう言ってもいいと思うんですけども、そのころまで私がイギリスをずっと書いてきたものが、盗作されるんですよ。見事なぐらいにすばっと盗作される。私はイギリスにいなければ絶対手に入らない文献を見つけて、向こうで文献を翻訳して紹介すると、絶対に文献を持っていないはずの人がすばっと抜いちゃうんですね。それを何回かやられているうちに、よし、まねできないような文体にしようというのが1つです。

そのときに思ったのは、どこかの本にも書きましたけれども、私は司馬遼太郎さんが大好きなので、司馬遼太郎さんの本を読んで、例えば10ページとか20ページ読んで、読んだ勢いでもって自分の原稿を書くと、司馬さんの文体が移ってくるんですよ。そうすると比較的読みやすい、あまりだらだらしてい

ない、すばっすばっと終われる文体で書けるようになったんですね。司馬さんのおかげみたいなどころがあるんですけど。

【司会（戸田）】 それまで会計学は、何を言っているかよく分からないぐらいのが思想的に深いと勘違いされているし、逆に売れないぐらいがいいんだみたいな、不思議な考えが横行していたのかもしれないですね。

【田中】 若いころ東大のS先生と一緒に仕事をしているときに、「先生の書くものは難しいから」と言ったら、「私は東大の先生ですよ。誰でも分かるようなやさしいものを書いたら、私はクビになりますよ」と言うんですね。ええっ、東大の先生って、やさしく書くとクビになるのよ。（笑）要するに難しく書くことが自分の仕事だという思いがあるみたいですね。いまだに多分、あの人の文章というのはほとんどの人が理解できない。やさしく書くには知恵がいるけども、難しく書くのは知恵はいらないですからね。

【岡村】 先生の出版された、新しいタイプの本と言っていると思うんですね、日本ではね。会計の領域では、でも、最近はどういう本が非常に多くなってきました。

私もアメリカにいたことがありますけれども、そういうある意味では時代を映している、際物っぽいと言いますか。今、どういうふうに動いていて、それが近未来ではどういうふうになっていくんだという、そういう会計に関係する本が結構出版されてきて、きっと先生はそういう種類の本を狙ったのかなというふうに思ったんです。

でも、それはとても重要で、会計は何をやっている、どういうふうに動いていて、どういうふうに動こうとしているのかといったことが一般の人にはなかなか知られない存在だったので、そういう意味では、一般の人に啓蒙と言っては言い過ぎかもしれませんが、そういう会計の話を説いて聞かせるというのはすごく価値のあることだと思いました。

【田中】 私はそう思うんですよ。いつも学生に言っているのは、会計はそこら辺のパン屋さんも牛乳屋さんもみんな使っている技術なんだから、こんなに簡単なものを難しく言う必要はないって。



（戸田龍介氏：右）

【司会（戸田）】 それまで私なんかも、学部生、院生で読んでいた本というのは、大体制度の説明の話か、外国文献の大量の翻訳、2つのパターンのどちらかというのしかあまりなかった中で、先生のスタイルは最初、衝撃だったと思います。

話はもう既に、先生の会計学研究のほうに話がどんどん移っておりますので、ここで、田中先生がかなり前から、そしてかつぶれずに取得原価主義を主張されてきたことについてお伺いしたいと思います。

ちょっと話が長くなって申し訳ないですけども、ちょうどまだバブルの華やかしころに、新井清光先生と醍醐聡先生がマイクを握り合ってすごい激論をしていたことに思いを馳せたいと思います。

あの当時は、恐らく私もそうなんでしょうけれども、批判派に属している人たちというのは、時価主義が正しい、原価というのはいわゆる利益を隠蔽していると。たくさん利益を上げさせて税金を取ることが正しいのであって、原価主義を使って日本企業は利益を隠蔽しているのではないかという、簡単にいうとそういう主張で、時価というのを主張されていたと思います。

そのときに新井先生がちょうど、醍醐先生の目の前で、面白い議論だけど、そんな議論は財政学の分野に行ってやれと。ここは会計学の学会だぞという感じで、すごい議論をされていた記憶があります。

でも結局、あのあとバブルが崩壊して、逆に今度はマイナスが出始めていくと、だんだんと批判派の人でも、原価主義と言ったり、あるいは、早稲田会計学の流れを有する方も時価を主張されたり、どちらだからどうというふうなのは全然なくなったように思います。

私は今だから正直に言いますがけれども、先生も含めて、早稲田の方々が取得原価ってその当時主張されているのは、企業会計審議会会長の新井先生の門下で、原価を何としても崩してはいけな、それがアプリオリに決まっているからだと思っていたんですね。

その後を見ると、両者は何だか、あのときの主張は何だったのかなみたいな話で、ばらばらになっていく中で、私なんかは本当に今でも驚くのは、

あの中で田中先生だけは別に時代がどっちに転ぼうが、誰が何と言おうと、取得原価が正しくて、時価というのはいわゆるさくさくして間違っているという考えを一貫して持っていた、恐らく唯一の人なんだなというふうに、私なんかは思ってしまうんですけども。

【田中】 新井さんは政経学部から商学研究科に入ってきた人なので、簿記的な発想とか下地が薄くて、記録とか帳簿とかよりも会計報告の内容に関心が深かったようです。スタート台としての記録ではなくて、ゴールとしての報告内容に目が向いていたと言っているのではないかと思います。

ですから若いころは記録のベースとなる原価よりも、報告される情報としての時価に対する思い入れとか関心があったのではないのでしょうか。新井さんは、ペーパーとしては書きませんが、普段の会話の中に、ちらちらと原価主義を批判する話がでていましたから。

【（司会）戸田】 先生は院生時代に、今、名古屋にいる税理士さんの方で、先生が実は自分の論文を書いてくれたという人がおられますよね。（笑）その方は、神大の会計人会の飲み会に来られていて、たまたま私の横に座られたのですが、田中先生は院生のころから取得原価が正しいというふうに言っていたと話されていました。実は田中先生がお書きになった（笑）というのは修士論文ですか。

【田中】 修士論文ですね。途中まで書いたけど続きが書けなくなったという後輩…いや先輩もいましたけど。私は学部も大学院も家庭教師が主たる収入源で生活していましたから、12月ころは忙しいんです。どこの大学を受けさせるか、どこの学部なら合格するかを考えながら、入試直前の追い込みをする時期でした。今のようにセンター試験もなければ予備校の合格ライン情報も偏差値もないころでしたから、希望する大学、受かりそうな大学、滑り止めの大学…を本人や家族と相談して、時間があれば家庭教師の時間を延長して…という毎日でした。

疲れて自分の部屋に帰ってくると、誰か彼が待っているんです。私は部屋にかぎをかけないので勝手に泊っていく友人もいましたし、真っ白な原稿用紙を持ってきて「ここまで書いたんですが、この後は

何を書いたらいいでしょうか」なんていう相談や…いや相談ではなくて「書けなくなったのでお願いします」ということでしたが。私はどんなテーマでも自分の勉強になると思っていましたので、できるだけお手伝いをしたつもりです。中には修士論文のほとんどを私が書いたなどという人もいますが、オーバーですね、お手伝いだけです。

【司会（戸田）】 その方は田中先生とずっと一緒にいたらもう必ず原価主義者になるんですよと、すごい影響力の強い人なんだよというふうに言われていました。私は本当に不思議に思うのは、院生のように、まだ全体が見渡せていないと思われるときに、いろいろな学風が入ってきたりすれば、やっぱりこっちのほうがいいのかなとかいうふうに揺れるほうが普通かなと思う中で、なぜそのようにお若いときから、かつ、いまだに一貫して原価主義を主張されていたのかということです。

【田中】 意固地なんじゃないですか。（笑）

【司会（戸田）】 先生は時価については最初のことから何かおかしいと、一貫して思われていたんですか。

【田中】 たまたま先ほど、辻・本郷税理士法人の本郷孔洋先生から電話があったんですけども、彼も修士論文は私が書いたと公言しているんですよ。（笑）そんなことはないですよ。ちょっとお手伝いした程度です。

本郷先生の場合は今の自分に自信があるからそんなことを言えるのだと思います。お手伝いしたのは他にも何人もいます。私は修士課程を3年かけたと言いましたよね。2年のときに書いた自分の論文はちょっと不完全だった思いもあったし。

というと、3年目は比較的時間があるんですよ。周りを見たら、友達が書けないでいるから、「おまえ、こんなの書いてやるわ」って、冗談半分にかけていたら、そいつが続きを書けて言うんです。結局最後まで書きちゃったんですけど。それをみんな後輩が見ていたんですよ。

それで論文を書く時期になると、「田中さん、ここまで書いたんですけど」って、私が寝ている枕元に原稿用紙です。原稿用紙を見ると真っ白なんです。よ。「もういいよ、じゃあ書いてやると、何を書く

んだよ」って言ったなら、「ペイトンの物価変動会計なんです」、「ああ、ペイトンね。ペイトンは大変だよ。時代によって原価主義になったり、時価主義になったり、また原価主義に戻っているから」って。

言った以上、読まなければいけないじゃないですか、ペイトンの本も。で、読んだら面白かったのです。ペイトンは学者として見たら、その時代その時代で正直なんですよ。彼は原価主義と時価主義の間で揺れるんです。

実は、新井さんがそうなんですよ。ペイトンも新井さんも経済学から会計学に移ってきてますから、簿記的な発想がなくて、経済的な、原状描写を重視する発想が強かったと思うのです。最後には新井さんも原価主義を支持してましたが、原価主義に対してかなり懐疑的になった時期もあります。新井さんは、「原価・実現主義」と言ってましたが、自分で原価・実現主義を突き詰めていないから、どこかで経済的な発想、原状描写の発想が顔をだすんですね。そういうときに時価的な発想に傾いたのではないのでしょうか。

原価主義がいいと考えて原価主義を支持しているというよりも、排除法で原価主義を支持したんだと思います。時価主義がダメだから、残っている原価主義を支持するというではなかったでしょうか。

私みたいな、原価主義こそ会計であって、もしもそれに欠陥があるならそれを補強すればいいじゃないかという発想はない。新井さんは、世界が時価主義に傾いたときにはすでに原価主義論者の立場を鮮明にしていたと思いますが、それ以前は経済学的な発想というか時価に対するシンパシーを持っていましたね。

大蔵省銀行局保険部の仕事

【田中】 私は25年ぐらい前から大蔵省の保険の仕事をやっていたんです。保険会社の経理の規定をつくる話をずっとお手伝いしていたんですけども、そのときに保険業界の人たちといろいろ話をしている、だんだん確信を持ってきたのは、時価は使えないということでした。

つまり保険会社は生保も損保も大量に有価証券を

持っているわけですよ。その有価証券に含みがいっぱいあるわけです、バブルのときですから。大蔵省の官僚はその含みを表に出せて言っているわけですよ。そのころ生保はほとんど相互会社ですから、株式会社ではないので、相互会社は証券市場の土俵に上がってこないじゃないかというのです。

だから含みを全部損益計算書に出して、バランスシートに有価証券の時価を載けて、納税のほうは言わなかったですけども、外国の保険会社と対等に勝負するようにしなければいけないというのです。アメリカからそうするように言われていたのでしょうかね。

そういう話をやっているときに、大蔵の官僚としてみたら、アメリカに言われているとおりにオンバランスする、含み益を出すようにという話をしているときに、生保はそんなことはできないって言うんですよ。できない理由をいろいろ聞いてみたら、所有する株は売れっこないって言うんですよ。

例えば日本生命は上場会社の百何十社の筆頭株主じゃないですか。その筆頭株主がほんのちょっとでもどこかの会社の株を売ったら、一気にその会社の株価が大暴落するというんですよ。いわゆる日生が見放した会社という評価をされるので。逆に日生がちょっとでも買うと、日生のいわゆるフィルターを通った会社だというので、株価がぐっと上がる。そういう市場で、含み益を実現できるなんていうことは絶対あり得ないというのが彼らのよく知っている話なんですよ。

クロス取引

【田中】 そこで、当時、この含み益を使うときは、「クロス取引」という虚構の売買をするんです。売り手と買い手が売買価格と分量と売買の時間を決めておいて、市場で売買を成立させる方法ですね。売買が成立したら、今度は売り手と買い手が逆になってもう一回クロス取引をやる。そうすると売却益が計上できて、各社が保有する株の中身は変わらない。時価で評価して評価益を計上するのと同じです。保険会社だけではなくて、一般の事業会社もクロス取引を使っていました。

株の含みがあっても売却して実現することができ

ないから、こんな無理なことをしてきたのです。私は、クロス取引は書類上だけのやり取りであり、虚構なものだから禁止するべきだと主張して、証券取引所のルールを変えてもらいましたが、その後、時価会計が入ってきて、クロス取引なんかしなくても期末に時価評価することになりました。

含み益の金額は情報としてこれだけありますよと出すのは大事かもしれないけれども、これはオンバランスにはできないだろうと思いました。1回オンバランスすると、それが利益ですから契約者に配当されるし、場合によっては課税されるかもしれないしという、もしかしたらその利益を使って何かをやるうとする人たちも出てくる。

でも、それは実は使い道のない、空気が泡みたいなものだとはそのころ知らなかったですけど、これは実現する可能性のないものだというのを、盛んに私たちは研究会やなんかでもいろいろ官僚にも言ってきた段階で、確信を持ってきたんですよ。時価で評価する評価益は実現性がないんだと。

生保は、40年とか50年契約のお客さんを相手にしているときに、現在の株の含み益というのは誰のものかという議論を延々とやったんですけども、現在の契約者のものも一部あるかもしれないけれども、止めちゃった人の部分がいっぱいあるわけですよ。これをどうするのって。実現しそうにもないし、誰のものかも分からないし、これを利益として出すというのはどういう理屈からなのかということをいろいろ議論しているうちに、バブルが弾けて、それで私は生保の会社の人たちからすごく喜ばれました。あのときあなたがあそこで止めなかったら、われわれ生保は全部つぶれていたって。

そういう実学として使われている学問、そっちからの経験もあって、原価主義に対する思いが強くなったと思うんですよ。時価主義を主張するなら、一緒の土俵に上がって議論してほしいというんだけれども、議論をする人がいないんですよ。

原価主義への確信

【岡村】 多分、戸田先生が聞きたいのは、修士のころにそういう確信を持つようになった何か契機があるんですかということでは。

【田中】 1つは高校のときに簿記を習ってきて、取引を取引額で、つまり現金の額で記帳するというのがずっと身に染みているところがあるわけですよね。記録を使ってやるものが、時価主義だったら記録が要らなくなっちゃうわけじゃないですか。これは会計向きじゃないなという思いもあったし、やっぱり記録を付けていくことによって、家計簿でもみんなそうですけど、これは歴史ですから、歴史は将来を物語る、将来を照らし出す力があるんだと思うのです。

私は経営分析をやっているのでよく学生に言うんですけども、経営分析というのは、過去や現在を知るだけではなくて、次の1年、次の2年が過去のデータを分析することで読めるようになる、過去のデータは将来を照らし出す力があるから、その力を知るために分析をやるんだよと言ってきました。そのデータがなかったらどうしようもないですもんね。そういう意味では、まずは記録、それから派生する投下資本の回収計算、回収余剰としての利益というのが私の中にある会計観であって、そこには評価としての時価が紛れ込むということは原則としてないなと思うのです。

原則という言い方をしているのは、時価を物差しとして使うというのはあってもいいと思うからです。例えば低価法の適用のときに時価を使いますし、時価を全面的に使ってはいけないと言っているわけではなくて、使うことはある。ただし、それは損失とか失った原価の効用を測る物差しとして使っているだけで、時価評価しているわけではないですよ。

【司会（戸田）】 先生がかなり年齢を経て、原価主義思想を固められたのは、理論というよりも、現実というか、例えば保険会社とか官僚との実際のやり取りからということだったと思います。対して、早くから原価主義への確信を抱かれたのは商業高校時代のご経験も大きいのではないかと考えております。

昔、先生からお聞きしたのは、商業高校時代は、とにかく帳簿を定規で作ることから授業が始まりましたよというふうに言われていましたけど。

【田中】 昔はそうだったんですよ。罫線が引いてあ

るものはなかったですから、白い紙に定規で線を書いて、自分で仕訳帳や総勘定元帳を作って、商品有高帳や売掛金元帳を書いて、そういう作業を自分でやるから、帳簿と帳簿の関係や記帳の意味が理解できたような気がしますね。

【司会（戸田）】 恐らくその体験が、記録に基づく原価主義への確信につながっていると思います。私もそうですけど大学からひょいと会計学をやる人間って、もしかしたら例えば、昔であればマル経から入ってくるので、記録うんぬんという意識が薄く、測定属性としては原価よりも時価のほうがいいのではないかと考えがちになるのではないのでしょうか。

例えば、ファイナンスとか、経済学から入っていくと、もしかしたらあり得るかもしれません。先生がぶれずに原価主義を主張されてきたのは、恐らく、例えばまさに定規から引いた記録、そのような記録に基づく会計とはこういうもの以外にはありえないという実体験が支えているのではないかと考えます。

もう1つ、先生は、某政治家と会ってきととか、某政党のところに話しに行ってきたとか、某企業の方と意見交換してきたとかいうことをよくお話しされていますよね。つまり先生は実際のこれという情報を実はいろいろなルートから取っておられますよね。

あの裏の取り方は、ちょっとジャーナリストっぽいか、ほかの会計学者にはできないとか。ある人が言われていましたけれども、田中会計学の後継者っているのかといったときに、先生のご主張だけ見ると、誰か継げそうですけど、情報の採り方は簡単にはまねできないと思います。

【田中】 「田中会計学」なんて、ないですから。(笑)

【司会（戸田）】 でも、まねできないんじゃないかなと思って。恐らくわれわれ研究者のほとんどは、結局文献、外国文献も含めて文献を読んで考え、そして自らの論文を書くというスタイルをとっていると思います。それに対して、あれだけの情報の取り方をしている人は恐らくいないんじゃないかなと。

先生は時々独特な情報の取り方をされておられますよね。「この前誰々に会って、あれは間違いな

って確認した」みたいな話をされるので、これはつまり、誰かほかの人が継げたり何とかするというものではないなというふうに思ったりします。

ちょっと話は変わりますが、少し前に先生と石川純治先生と私の3人で食事したことがありますね。その時、著書や論文の最後に自分のメールアドレスを載せるかどうかのお話が興味深かったです。

石川純治先生もアドレスを載せていたこともあるのですが、いちいちものすごい批判に耐えられなくなっちゃったみたいで、もういいです。「田中先生はよくあんな勇ましいことを書いた後、最後にメールアドレスをどうぞみたいな感じで載っけておられますよね」と石川先生は仰しゃってましたが、お2人のスタイルの違いというのがあって、面白かったですけど。

それは先生、私の勝手な見立てですけれども、訳が分からない批判なんてどうでもよくて、その中で何か有効な情報が1個取ればいいって思われているんじゃないかなと。そんなことはないですか。

【田中】 私にそういう反論や批判をしってくる人はいないです。

【司会（戸田）】 いないんですか。

【田中】 いないですよ。批判や反論があれば学問は進歩します。だから、なおのこと激しく書くんですけどね。学会報告は最近全然しませんけれども、たまたま学会で報告をしたときでも、かなり刺激的な報告をするんですけど学者からの反論ってないじゃないですか。

含み益は実現できない

【田中】 例えば、横浜国大で醍醐さんと一緒に統一論題で報告したときも、醍醐さんも正面から議論しようとしませんよね。私が言ったのは、日本の証券市場は小さいし持ち合いが進んでいるので上場会社が持っている株は時価では売れない、だから有価証券の含み益なんて実現できないという話でした。

そうしたら、彼は言うじゃないですか、上場会社の所有株は何年かかければ売れるんだから実現可能だと。何年かかければ売れるというのは分かります。しかし3年後とか5年後に売ったときの売却益

なんか今年の利益じゃないですよ、本当は。それを5年後の売却益も10年後の売却益も全部今年の利益として計上するというのは、時価評価でも何でもありません、そんなことをやったら暴挙ですよ。所有株が来年いくらで売れるかも分からないのに、売れたことにして利益を計上するんですよ。

その後、エンロンが将来利益だごり押しできるものをすべて当期に計上し破たんしましたよね。IFRSにも、種を蒔いたら1年後の収穫を予測して当期に利益を計上するというのがありますけど、ファイナンスの世界ならいざ知らず、こうした話は会計ではないと思うのです。

そのときは東大の教授を傷つけてはいけなから黙っていましたがけれども、あの当時は時価がもてはやされていたから、醍醐さんも強気でしたね。考え方が醍醐さんは醍醐さんなりに一貫して言っているんでしょうけれども、実務がないだけ分からないだなと思いましたね。自分の主張が日本経済や企業決算に与える影響を、透明性とか比較性の観点からしか見ていないように感じました。

評価益はあの人にしてみたら、要するに実現可能なものだという、10年かければ実現できる100億円の利益があったときに、今年実現できるのは10億円だったら、今年利益として上げるのは10億円でしょうという論理はあの人にはないんですよ。10年かけて実現できるんだったら、それは全部利益だという。国際会計基準とよく似ている。それと不思議なのは、醍醐さん、ここ十何年間、何も書いていないですよ、時価会計に関しては。どうしたのかなという思いはあるんですけどね。

情報の採り方

【田中】 自分のメールアドレスの話ですが、特別に私、そこから新たな情報が入ってくるということはほとんどないです、実をいうと。たいてい読まれた方は自分の会社の話を書いてくれるだけなので、業界の動向とかの話はありません。

情報の取り方も裏の情報なんてないですよ。ほとんど表の情報ですよ。税務経理協会の『税経通信』に月一回の連載記事を載せています。6年ほど前からで、間もなく70回を迎えます。「よくも毎月書く

ことがあるね」と冷やかしの言葉を頂戴することもあります。書き続けることが大事だと思って駄文を載せてきました。今の連載は今年（2013年）の1月号からの原稿なんですけれども、最初の原稿から「学者の寿命—60歳限界説」なんていうテーマでした。（笑）この連載の12月号に国際会計基準の資金の話を取り上げたんですよ。

【岡村】 財団の資金ですね。

【田中】 そうです、IFRS 財団の資金はどこから来るのかというのを書いたんですけど、今まで皆さんは書かないんですよ、財団の資金がどうなっているのか。この間、三菱電機常任顧問の佐藤行弘さん（金融庁顧問、経済産業省企業財務委員会委員長）と会ったときに財団の資金の話が出たんです。戸田先生もご一緒の時でしたが、これ、みんな知らないんだったら、書いて紹介したほうがいいなと思って書いたんですけども、秘密の情報でも何でもありませんよ。全部ネットで探していけば、そういうデータがあるので、そのデータを集めて書いていただけなんです。集めてみると面白い結果が出てくる。書いていて楽しかったです。

情報の集め方と言われても、特別の方法があるわけではなくて、私にしてみたら、例えば毎日のように監査法人やなんかはメールを送ってきますから、誰でももらえるメールですから、それをちょこちょこっとチェックしてみたり、ロンドンのIASBのホームページを見てみたり、アメリカのSECのホームページをちょろちょろっと見て、中まであまり深く見ないですけども、こういう動きがあるんだなということを知ると、どこかが調査をやると言ったときに、これは一緒に調査してくれないかって頼むんです。

例えば東洋経済が日本の企業の対応をアンケート調査するというから、じゃあ、こういうことも訊いて、こういうことも調べてって頼むんです。ところが向こうがそれを記事にしないことがあるんですよ。記事にしないとデータがもったいないじゃないですか。それを使うと、表向きは出所不明のデータになるので、裏情報かもしれませんね。（笑）

毎年、TKCの仕事もしますが、IFRSに関係したセミナーなんか開くと全国から1000人ぐらい集まる

んですよ。1000人というと、大体800社ぐらいの会社から人が来ているじゃないですか。その人たちにアンケート調査を頼んだときに、そのときに私も自分の感じていること、自分の知りたいことをちょっとアンケートの中に紛れ込ませてもらうんですよ。そうすると必要なデータがただで手に入る。そんな程度であって、特に裏の情報なんていうのはないんですけど。

政治家とのコンタクト

【田中】 ただ、向こうからコンタクトを取ってきて、会いに行くと話をする、面白い情報が手に入ることは確かにありますよね。でも、それはこっち側から行くということではなくて、例えば2、3日前も自民党から電話がかかってきて、話は後日ということでしたが、その後連絡はありません。民主党のときにも、企業会計小委員会みたいところから呼ばれて話をしてきました。政治家の方々は向こうからコンタクトを取ってくるのであって、私からコンタクトを取ることはありません。

国際会計基準に関しては、当時の金融担当の自見庄三郎大臣がしばしば私に声を掛けてきたので、会って何度か話をしました。先にペーパーを書いて読んでいただきましたから、お会いしたときは酒を呑むだけです。（笑）そういう機会はありましたけれども、こちら側からコンタクトを取るというか、こちらから情報を欲しくて取りに行くことはまずないですね。だから、誰でも手に入る情報でペーパーを書いているはずなんです。

【岡村】 そういうことになると、アイデアというか、何を書きたいかなという、そこに全部行き着くわけですよ。つまりそうしたデータを取ってくるわけですから、関心がなければデータは取れない。

【田中】 何を見ても材料に見える。（笑）

【岡村】 たくさんポケットがあって、こういうテーマ、あういうテーマを持っていて、それは時代を照らしているわけですけども、時流を照らしているわけですけども。

アンテナを高く

【田中】 岡村先生は料理をしますか。

【岡村】 私？ しますよ。

【田中】 料理すると、例えばスーパーなんかに行ったときに、新しい食材が入っていたりなんかすると…。

【岡村】 目に入りますよ。

【田中】 目に入ったら、今日はこれを料理しようとか、新しいフルーツかなんかが出ていて、食べ方が分からない。これはどうやって食べるんだろう。取りあえず1個買って見て、食べ方が分からないから、ちょっとネットで検索をすると、こうやって食べるんだ、じゃあ切ってみようとやりますよね。それと同じなんです。何かを見たときに、これ、使えるんじゃないかと思ったら、とりあえず頭に入れておく。

【岡村】 たくさんアンテナを張ってある、いつもアンテナを張っているという、そういうことだと思いますけど。

【司会（戸田）】 いつもおいしい料理をどうやって作ろうと思っているので、ちょっと出ると、これは、こう使おうっていう。

【岡村】 素材のほうが入ってきてくれるというか。

【田中】 親しくしている飲み屋さんだと、これはどうやって味付けをしたのって聞きますからね。隠し味があるんだろうと。

【岡村】 ノウハウのはずなのにね。それが手に入っちゃう。(笑)

【司会（戸田）】 でも、おいしい料理を作る人は、「おいしいな、どうやって作ったの」って聞いたら、「こんなの簡単だよ」って言うんですけど、それが実はなかなか難しいですよ。

【田中】 同じ味が出せない。

標準的テキストの功罪

【司会（戸田）】 ちょうど今、会計学研究について、「戦後会計学の軌跡と反省」というようなところでお伺いしておりますけれども、会計とはというか、大上段で田中会計学というのがもしあるとすると、先生のお考えになる田中会計学というのはどういうものなのか、先生ご自身のお考えをお伺いしたいと思います。

【田中】 私、高校・大学から今までの間、約50年間

ほど会計学に付き合ってきたわけですよね。大きな事件というか、大きなものが3つあったような気がするんです。1つは昭和24年、私はまだ6歳ですけども、企業会計原則ができて、その企業会計原則なんていうのは翻訳ですから本当のことは何だかよく分からなくて、かんかんがくがくの議論をやっている真っ最中に私は大学に入って、大学に入ったのが昭和37（1962）年ですから、当時は企業会計原則の中身を商法に取り込むかどうかという、商法との調整をやっている、日本の会計学者が一番熱を帯びていた時期にちょうど大学に入ったんですよね。

マーケティングだとか、金融論だとか、物流だとか、近代経済学だとか、みんな大体アメリカ経由で入ってきた学問は全部同じ時期だったような気がするんですよ。

だから、大学で私も会計学の勉強をやるという気持ちでいながらも、隣でマーケティングがものすごく人気なのを見ていて、マーケティングって面白いんだなと思って、そのころは宇野政雄先生というマーケティングの先生がいて、その先生の授業に行くと、確かに面白いんですよ。今でも宇野先生の講義を再現できるくらい記憶に残っています。

もう1人原田先生という人もマーケティングを持っている先生がいるんですけども、これも面白いかと思って行ってみたら、全く面白くないんですよ。(笑) 私が高校時代に習った商業学と同じだったんですね。

その両方の先生の話聞いていて、マーケティングも人によって違うんだなと思っていたんですけども、ほかの学問をいろいろのぞいたのは、全部アメリカから入ってきて、日本でやると議論ができるくらいまで理解が進んできた時代でした。ただ単に外国文献を翻訳する時代から、日本に定着させる時代だったのかもしれないですけども、そのときに私は学生時代を迎えていますから、会計学がものすごく熱かった時代だったんですよね。それはどこの教室に行っても、会計学者が汗をだらだら流しながら熱弁を振ってくれた時代です。

それからしばらくすると、会計学の標準的なテキストがいっぱい生まれ始めてきて、佐藤孝一先生が書いた800ページぐらいの『現代会計学』とか、『新

会計学』みたいな、ああいう本が底本となっている。それから、飯野利夫先生の『財務会計論』、あの本は何年ぐらいでしたか。

【岡村】 たしか昭和52年（1977）。

【田中】 あれは私が教員になってからなんですけれども、日本の会計教育も会計研究も、教科書で学ぶスタイルにだんだん変わってきました。太田哲三先生じゃないけれども、黒澤清先生の教科書、山下勝治先生の教科書、佐藤孝一先生の教科書と、教科書で会計学を勉強する時代が変わってきたんですよね。そうなってくると、これはあくまでも学問じゃなくて、科学として、知識として吸収する時代になってきたのかなと思うんですよ。

そのころになってくると、学問がだんだん分化し始めて、いわゆる企業会計原則全体の研究なんていうのは大体終わっちゃっていますから、その中でどこかの部分部分だけを勉強する先生方が増えてきて、会計学が「たこつぼ化」しちゃったというんですかね。その途中で出てきたのが、さっきから出ている時価会計。私もたまたま時価会計を批判する立場になったので、激論の真ただ中に投げ込まれたというか、本当に時価主義者が100人、反対論者の私が1人という、そういう時代をずっと経験してきたのは、私の学者としてみたら第2期だったのかなと思うのです。

国際会計基準の時代

【田中】 第3期が、国際会計基準の時代ですか。これは少し仲間がいますけれども、何人かでもって反論している。「待て、とんでもない話だぞ」ということをテーマとしてやっている。

振り返って見てみますと、私のベースになっているものに、会計というのはローカルなものだという思いがあるんですよ。企業会計原則を勉強しているときに思ったのは、企業会計原則ってすごく温かい、冷徹さが無いという、ちょっと言葉が分かりにくいかもしれないですけども、企業会計原則が一番狙っているのは企業の存続繁栄なんですよ。どうもどこか勘違いして、最近の会計基準でいうと、「利益が出せないんだったら、さっさと事業をやめちゃえ」というような、そういうのを決める基

準みたいになっているじゃないですか。

企業会計原則を読んでいくと、例えば臨時巨額の損失の繰り延べ経理を認めるとか、内部留保ができるように、企業がばたつと行かないようにという仕組みがあちこちに、例えば国庫補助金の資本組み入れみたいな話、あれは税法から反対されて、結局最後には利益のほうに回されたけれども、企業会計原則の考え方として見たら、国庫助成金はあれは資本として扱って初めて企業が存続できるのであって、もらったものだから利益だという発想はもともとないわけですよ。

あの温かい、私は温かいと言うんですけども、私が学問をスタートしたころ、企業会計原則がベースにあったのかなと思います。あれは単なるルール・ブックではなくて、会計の哲学といたら大げさですが、一種の会計思想が盛り込まれていると思います。

その後に時価会計の批判にしろ、国際会計基準の批判にしろ、これは同じなんです。これをやったら日本が駄目になるぞ、これをやったら日本の産業はつぶれるぞという思いが非常に強くありますね。そういうことをやって構わない国だったらどうぞやってください。でも日本のように、やらないほうがいいという国もあるし、やってはいけない国もあるだろうと思うのです。

イギリスとアメリカの会計観の相違

【田中】 しばしば例に出すのは、イギリスとアメリカという兄弟国の利益観の違いというんですかね。イギリスは木が大きくなって成長したところで、それを利益とは思わない。そこにリンゴなり、ミカンがなって、実がなったら利益だけれども、木が成長したというのでは利益とは考えない。いわゆる土地の価値（時価）が増えたものを利益とは考えない。

アメリカはその点は社会資本の薄かった国だから、どちらかというと、何でもいいから利益と呼べるものは全部利益にしようという発想です。だから、木が成長したらその成長分は利益とする、実がなくてもかまわない、実がなったらもちろん利益なんだけれども、木が大きくなったら、それだけで利益と呼ぼうという、だから土地の値段が上がっ

たら、それを利益としようという発想の国と、いや、土地の値段が上がったって、価値は増えているわけじゃないんだから、価値が増えたなら別だけれども、そうじゃないので、土地の値段が上がっただけだったら、これは利益としない。木が、幹が太くなくても、実がなっているわけじゃないから、これは利益としないという、会計観というか、利益観が全く違うじゃないですか。ということは資本観が違うわけですよ。

という、イギリスとアメリカでそれだけ利益観とか資本観が違うんだったら、日本には日本の資本観があっただけじゃないかなと思うのです。だから戦後日本がほとんどどうしようもないぐらいに壊滅的な状態だったときに、そのときに厳格な会計基準を持ってきたら、どこの会社だって決算をやれば真っ赤っ赤ですよ。

そうじゃなくて、真っ赤っ赤にならないようにするための会計基準というか、会計原則を最初に設けて、企業と産業を育成していく方向に持っていかうとしていたというのは、その時代の会計観、その時代の資本観だったのではないのでしょうか。少し日本が経済力を付けてきたら、それなりに修正する必要があるとは思いますが、基本的には企業会計原則のスピリッツを大事にしたいと思います。それが今の私の会計観かなと思うんですけどね。

3つの時代を経験できたというのは、私自身にしてはよかったと思うんですよ。逆にいうと、3つの時代を経験して、3つの時代それぞれに関係したから、実をいうと、いつまでもペーパーが書けたのかなという気もするんですけどね。

【司会（戸田）】 これは私の本当の聞きたいこととか、私や奥山先生はあと10年、20年と研究生活をやっていかなければいけないわけですけども、会計学って次はどこに行くのか、ぜひ先生のご意見を伺いたと思います。会計研究とか会計学って、先生の見立てだと、今後10年、20年、30年ぐらいのタームで、どんなふうに進んでいくとお感じになっておられるのでしょうか。

『会計学はどこで道を間違えたのか』

【田中】 この間、私、実に不謹慎な本、税務経理協

会から『会計学はどこで道を間違えたのか』という、とんでもなく不謹慎な本を書いたんですけども、今の会計学は出発点を間違えているという思いは非常に強いですよ。会計の機能というか目的を完全に誤解して理論や実務を組み立てようとしていると思うのです。

私が会計学を勉強し始めたころは、山下勝治先生の本には利害調整会計と書いてあって、読むと面白いんですね。会計には株主や債権者の利害を調整する力があるんだということを書いてあるんです。会計ってすごい力があるんだと感心しました。

でも、佐藤孝一先生と山下先生の対談が『企業会計』という雑誌に載っているのを読むと、佐藤先生が山下先生に言うんですよ。「山下君、会計には利害調整なんていう機能はないんだよ」。そのころは何を言っているのかよく分からなかったんですよ。随分たってから、会計というのは、投下資本の回収が終わって、回収余剰の計算をして、その資本を出してくれた人たちに納得してもらう、そのアカウント、説明するのが会計なんだという話をあちこちで聞いているうちに、会計ってそこまでなんだと分かるようになりました。

それが結果的に利害調整になるかならないか、利害調整になっていけば、山下先生はそこを言って利害調整会計だと言っただけであって、利害を調整しようと思って会計をやっているわけではないんだと気が付いたんです。結果として正しい利益を計算すれば、株主も納得するし、債権者も納得するし、課税当局も納得する。これが結局利害が調整されたと見ているのが山下先生の考えではなかったでしょうか。

あのころ情報会計なんて誰も言わなかったんですよ。武田隆二さんあたりが『情報会計論』とかという本を出したあたりから、会計の情報の局面がかなり強調されてきて、でも、そのころはまだ伝統的な投下資本回収計算に取って代わる話ではなくて、会計の情報力を高めようというだけだったような気がするんですよ。

それがはっきりいつかというのは、例えば国際会計基準の中のコンセプチュアル・フレームワークもそうですし、FASBのコンセプチュアル・フレーム

ワークの中でもそうなんですけれども、情報の一番の利用者を投資家だと決めてくるじゃないですか。まず投資家ありきで、投資家に必要な情報を提供するのが会計だというふうに。第一の利用者が投資家だから、投資家のために必要な情報を提供するんだという出発点というか、会計の目的を決めた途端に、会計は何でもありになったんだと私は思うんですよ。

どんな情報だって、これは投資家が必要としている、これも投資家が必要としている、そんなことは簡単に証明できる。だから資産の時価を出せ、負債の清算価値を出せ、そうした情報が必要なことは簡単に証明できる。負債の時価評価益を出せというのも、全部投資家が必要としているという話です。そのことは誰でもいくらでも証明できるけれども、逆はできないんですよ。そんなものは投資家は要らないとは言えないのです。これはアリバイ（不在証明）と一緒になんですよ。

「その情報は要らない」という人を100万人集めても10億人集めても、たった一人の投資家が「その情報がほしい」と言えば「投資家が必要としている情報」だと強弁できますから。100万人が「目撃していない」という情報よりも、たった一人でも「目撃した」と言えばアリバイは成立しないのと同じです。

逆は証明できないとなると、今度、会計基準をつくっている側に見たら、どんな基準をつくってもOKなんですよ。どんな基準をつくったって、これは投資家が必要としていると言っているんだから、含み益は全部オンバランスするんだと。例えば資産除去債務を資産計上するんだって、これも投資家が必要としているっていえば全部簡単に説明がつくんですけど、逆はできないわけですよ。

今、国際会計基準はその時代なのではないでしょうか。スタートラインを自分たちの勝手なところで決めておいて、勝手なところというか、投資家が必要としている情報を提供するのが会計だ、投資意思決定会計なんだというふうに言っちゃったら、もう自分たちが好きなような会計基準がつかれる時代です。

会計は「合意の学」

【田中】ただ一番大きな問題は、その会計基準を周りが納得しないということではないでしょうか。現在の株主が納得しない、経営者が納得しない、全部の国ではないでしょうけれども、会計が課税に関係する国では課税当局が納得しない。一番会計を使っているところが納得しないような基準に今なってきたんではないかなと思います。

私はいつの時代にも、どこの国にも通用する会計観というものは無いと思っています。同じように、時代や国を超えた「正しい会計基準」とか「正しい利益」なんていうのもないと思うんです。あるとすれば、その国、その時代において、大多数の関係者が合意する、納得する会計観や利益観ではないでしょうか。私は、会計学は、その国、その時代の多数の関係者の合意を形成できるかどうか、納得してもらえるかどうか、その存在意義を左右していると思います。

社会科学は、いや自然科学も、どれも同じではないでしょうか。天動説だって、その時代では「正しい」と信じて何も不都合はなかったし、地球が丸いということが分ってから、「水準器」が使われています。

先日、いつも私が使っているテニスコートで、練習の合間に青空を眺めていたんです。私が住んでいるのが三浦半島の横須賀なので、たびたび飛行機が通るんです。10分も眺めていたら、20機や30機は飛んできます。そのとき、何気なく見ていると、今飛び立ったばかりかのように機首を上げて、太陽に向かって突き刺さるかのような角度で飛んでくる飛行機を目にしました。三浦半島には飛行場はありませんが、近くには米軍の横須賀基地や自衛隊の基地があります。でも飛行場はありません。

どこから飛来してきたんだろうと不思議に思っていましたら、次の飛行機も太陽に向かって飛ぶように急角度で飛んでくるではないですか。でも、しばらくするとどの飛行機も水平飛行になるのです。

違うんですね。私が見ていたのはずっと水平飛行の飛行機なんです。それが、地球が丸いために、遠くの飛行機が太陽に突き刺さるような角度で飛んできて、真上にきたときには水平飛行に見えるよう

になるんです。それを見て思いました。私たちは、地動説が正しいことや地球が丸いことを知っているけれど、生活の実感としては「天動説」、「地球平面説」と変わらない。私たちの日常生活では、誰も天動説…車で移動するときに、このままいけば地球の裏側に出るなってことを考えませんよね。頭では「地球は丸い」ですが、実生活は「地球平面説」なんです。日常生活は「地球平面説」が合意されているんです。

『原点復帰の会計学』

【田中】 あの本（『会計学はどこで道を間違えたのか』）を書いてからなんです。じゃあ、会計はどこに行くのという話です。原点に戻っていくというのは、日本の会計だったら、企業会計原則に1回立ち戻って、企業会計原則がいいと言っているわけではなくて、企業会計原則のスピリッツがいいと私はよく言うんだけど、あの会計観に立ち戻って、原価・実現主義みたいな発想で、取得原価主義の枠内でもって、投下資本の回収計算をやる会計に1回立ち戻って、足りないものがあれば情報として出す。必要な情報を出すことは一向に構わないと思っています。それは会計じゃないと思っていますから、私は。

というのが今これからやっていくとすると、やっぱり戻ることも大事なんじゃないかなと。特に戸田先生が若いころ、損益計算書と貸借対照表のアーティキュレーションの研究をやっていたじゃないですか。まさに複式簿記から出てくるデータをきれいに2分割できないというか、それを無理やりやると損益計算書か貸借対照表にゆがみが生じる。戸田先生もペーパーを書いていましたけれども、複式簿記不要論、邪魔なんですよ、一部の人たちにしてみたら。複式簿記があるから、借方に何かを持ってくると、貸方にも何か持っていかなければいけない。本当は借方は要らないと思っているのにです。

例えば負債の時価評価をする。評価益が出る。その評価益の計上はしたくないんですよ、本当は。評価益を計上することになってしまうと、未実現だとか、実感に合わないとか、つぶれそうな会社が儲かる会計とは信じられないとか、いろいろ出てきま

す。そういう議論をせずに、あくまでも負債の時価がいくらかを書きたいだけですよ。

あるいは資産除去債務も資産除去債務の額を債務の額として書きたいんだけど、そうすると右左合わないから、借方にも何か書かなければいけないので、無理やり資産にも計上する。そんな無理なことをすると納得してもらえないんだったら、貸借、バランスをしなくてもいい会計をやりたいというのが一時期、国際会計基準の議論の中でも出てきましたよね。

【司会（戸田）】 記録も要らないし、複式簿記も要らない。リスクとチャンスの情報だけだと載っかっていればいいとなったら、恐らく会計とか簿記は要らなくて、ファイナンスと統計学とあとは近経の理論で後付けすればいいわけですから、われわれは失職ですよ。（笑）そう思うんですけど。

【岡村】 これは田中先生の座談会なので、あまり言っておかしいのかもしれないけれども。

【田中】 会計グループの座談会ですから、ご遠慮なく、なんでも話してください。

【岡村】 非営利をやるようになって、非営利の場合の資金調達ももちろん重要なんですけれども、ドナーというか、寄付者が資金を提供してくれるような情報を提供するわけですよ。日本の場合には寄付文化がそんなに育っていませんけれども、そういう情報としては、資金を預かったら、その資金がミッションにどの程度生かされて、そしてそれが社会にどれだけ還元されたのか。

例えば震災が起こったときに、寄付をしたい。あるいは物を提供したい。その物がちゃんと被災者に渡っていくという、そういうプロセスを明らかにするということが重要で、そういう点からすると、非営利の場合にはアカウントビリティというのはかなり根強くあるわけですね。また、それがなければ非営利というものが存在しないように思うわけですよ。

企業会計での例えば減損は非営利のほうにも入りつつありますけれども、企業でやっているから非営利でもやれという理屈ではなくて、本来はミッションに対してどの程度それがやれたのかという、そういうアウトカムの報告が必要なんだろうと思うん

ですよ。非営利から営利の会計、企業へお返しをする時期が来たんじゃないかという、そういう感じを私は持っています、そういう点から研究をしているんですけども、なかなか進まないんですけど。

ただ、今の答えになるかどうかは分からないけれど、切り口を変えてみると、全く違った領域で同じ会計を使っているながら、投資者サイドに立っていない、そういう会計を考えたときに、簿記は極めて重要な位置を持っているということが分かるわけですよ。つまり運用責任がどの程度果たせたかということが分かるから。文字どおり会計責任の説明になっていくわけですよ。

【田中】 500年の歴史を誇る簿記が依然として使われているというのは、これに代わる技術がないのが1つなんですけれども、一番大きなファクターは、複式簿記に対するニーズが非常に高いことだと思うんですよ。

【岡村】 農業会計を最近やられているから。

【司会（戸田）】 本当に農家のおばさんが複式簿記でびっくりするのは、聞いてみたら、ストックの管理だという人もいますけれども、何ていったってフローですよ。あのフローの発想は複式処理をしないと出てこない。要するにトラクターは見ているんですけども、トラクターに費用が発生するという発想はないんですよ。補助金が出たら買っているだけで。あそこに減価償却費みたいな概念が出てくるのは、複式という処理の中でフローの把握をしようとするからなんです。

それともう1つ。複式簿記で作った財務諸表があると、それまで採めに採めていた組合員総会があったという間に終わると言っていました。要は、複式簿記には、合意形成の機能もあることが実感されていたこととなります。複式簿記の意義については、立場の異なる人たちから聞くことで、改めて思い直すこともあるものだと思います。

アメリカの評価基準

【田中】 切り口を変えるのも1つと、応用問題を解くというのでもいいかなと。例えば私なんか経営分析をやっている、財務諸表を見たときに、寡少資本の会社があるじゃないですか。寡少資本だとROE

(株主資本利益率)が高いんですよ。(笑)

【岡村】 極端に高くなります。

【田中】 めちゃくちゃ高くなるんです。アメリカなどではROEが高い会社はいい会社だと言われていますが、とんでもないですよ。寡少資本、つまり株主資本が小さいということは、この会社がつぶれたときの損失は株主が負担しないということです。リスクを取る資本家がいなくて、株主以外の社債保有者とか取引先から集めた金でもって賭け事を行っているようなもので、自分は一切金を出さなくて、他人の金でもってギャンブルをやっている、もうけたらかささらっていくような、賭場の胴元みたいな商売をやっているんですよ。

だからROEが高いというのは考えもので、もうちょっと「率」だけで見るんじゃなくて、「金額」もよく見なさいという話です。この会社が自己資本が非常に厚くて、何かのときには株主がちゃんと責任を取るんだという体制を取っているのか、他人の金におんぶに抱っここの経営をやっているのかという、普通の人はバランスシートの分析なんかしないですから、会計学をやる人間の仕事なのかなと思います。

それと幾つか、先生方にちょっとずつまたお伺いしたいんですけども、これからの研究テーマとして私が考えているのは、今たまたま税理士の人たちといろいろな仕事をしているんですけども、今の税理士の方々がはっきり言ったら墮落しているんですよ。稼いでいる税理士は何もしない。一切しない。

税理士業界の将来性

【田中】 稼いでいない税理士はあきらめている。(笑)よく私、あちこちの税理士会でその話をして、税理士業界の現状は先生方の事務所は栄えているかもしれないけれども、業界全体として見たら、こんな輝きを失った、なり手のない業界はないですよと警告しています。だけど税理士の皆さんがもしこの世の中になくなったら、日本の国家が税収が確保できなくて、やっていけないですよと言ってきました。税理士の皆さんはその意味で半分国家公務員、準国家公務員なんだからという話を片一方でし

ながら、半分、税理士はもう駄目だと思ってあきらめているんですよ。

自分の仕事にプライドを感じている人はほとんどいない。収入だけで自分の仕事を評価している。情けないですが、学者も似たようなものですね。安定した収入と、それなりの社会的地位があれば、それ以上のことはしない…。税理士なら、あとはゴルフでも接待でも、取引先の社長が喜ぶようなことをすればいい。

学者なら何もしないほうが恥をかかない、何か書いたら実力がばれてしまうので、書かずにいれば、大学教授の顔をしていられる。仕事をしないほうが社会的な地位を保てるのですから、大学教授は「乞食」と一緒に一度やったらやめられない……らしいですね。私もその世界の恩恵をたっぷり受けてきました。

今の税理士はほとんど1人税理士事務所ですよ。共同でやるような税理士法人ってなかなかつくらないじゃないですか。という、1人の判断ですべての会社の判断をするから、医者でいうと誤診をするのは当たり前ですよ。税理士も誤診・誤判断をする危険があるからと思って、いくつかの事務所を組み合わせるとすると、けんかするんですよ、税理士同士が。

私はあちこちから頼まれて税理士事務所を紹介するのですが、その案件によって何々先生と何々先生で相談して、お客さんに説明してくださいと言うと、お前がやるならおれはやらないとか、おまえがやれとかというんです。私には信じられないほど、他人の意見を聞かない世界なんです。

セカンド・オピニオンの時代

【田中】 だけど今の時代、病院でも重要な病名の判断とか手術のこととかは、担当の医師の他にもう1人の医師が同席して説明してくれるようになりましたよね。いわゆるセカンド・オピニオンです。

税務のことで、1人の税理士でやるとお客さんは納得しないんですよ。これから相続の時代じゃないですか。そうすると、税理士法人みたいな組織を持って、しかもお客さんには何人もの税理士と一緒に会って、それで税理士の先生方が、これはこうだ

よ、こっちがいいですよ、そうですね、これにしましようねという、専門家が相談して決めたことだったら向こうは疑わないのに、たった1人の先生が出てきて、これはこうで、ああで、こうしたらいいですよと言われても、セカンド・オピニオンは取れないわけですよ。

私は、税理士が1人で何でもかんでもする時代じゃないということを感じているんですけども、顧問料を銀行振り込みにした途端に、税理士はもう顧問先にも顔を出さなくなりましたし、顧問先の社長の声や相談にも全く聞かれないようですね。何もなくても顧問料が銀行振り込みで入ってきます。それ以上のことはする必要がありません。いい商売です。何もしないほうが稼げるのです。

そうした状況では、個々の税理士に危機感はありませんから、税理士の法人化は全然進んでいないですね。今の多くの税理士にはプロとしての意識はないですね。稼げればそれでいい…。

公認会計士ははるか以前に、公人としての意識を失った仕事をしてきたように感じますが、税理士も自分がよければそれでよいという、自分の職業にたいするプライドを失ったように感じます。学者は、もっとひどいですが。

社内不正の予防と早期発見

【田中】 最近いろいろやっていますが、もう1つは社内不正をどうするかというテーマです。会計には社内不正を防ぐ力がいっぱいあるんだけど、内部統制みたいなあんな外来のハードなものではなくて、日本が昔から使ってきた配置転換だとか転勤だとかいうのがありますけれども、それだけじゃなくて、複式簿記のシステムをうまく使えば不正はかなりの程度防げると思うのです。なにせ、借方と貸方を別々の人が記録することができるんですから。

1日の最後に集計して、貸借が合わなければいけないわけですから、どこかで不正をすると、もう一方のほうで気が付くようなシステムになっているんですね。それにもかかわらず、帳簿を付けるのがコンピューターだから、簡単だからって1人で全部やってしまうと、これは逆に不正の元になるんじゃないですか。これを何とか分けて、なおかつコストが

かからない状態で、企業内不正をいかに防ぐにはどうすればいいかというような、その応用編をいろいろ今考えたりしています。

それからごく最近でいうと、冠婚葬祭互助会の経理問題に取り組んでいます。外部の人間には互助会の経理がよく分からない。情報も十分に公開されていない。中には破綻しそうなところもあるかもしれない。冠婚葬祭互助会の監督官庁は経済産業省なんですけれども、経済産業省にしてみたら、自分のところが認可したところが破綻すると、自分たちが責任を問われかねません。官僚としても何とか互助会の経営をコントロールしたいというので、この冠婚葬祭事業の経理というのはどうあるべきかという、またこれも、類似の業界がないだけに難しい。そういう応用編を含めて、まだまだやっていく仕事はいっぱいあるんじゃないかなと思うんですよね。

【司会（戸田）】 簿記や会計って、日商簿記の検定の受験者も減っているように、今だんだん人気を失ってきつつあると言われていています。このような中で先生は、小学生に簿記を教えようとしておられるとか。

【田中】 そろばん塾の生徒さんを集めて、簿記を教えるんですよ。子供簿記教室ですね。

【司会（戸田）】 大人になって証券投資に壁を感じさせないようにするために、小さいころに類似ゲームになじませるという発想もあるようですが、発想じゃなくて本当にやっちゃうところはすごいという感じですけど。

【田中】 日本ではちょっと証券投資の話は小学生には持っていけないので。親がアレルギーを感じるでしょうね。その点、簿記は「読み書きそろばん」の範疇に入りますし、親子で一緒にやれます。

【司会（戸田）】 本当に将来の簿記や会計ということまで、いろいろお考えになっていると思います。はからずも最後になりましたけれども、先生が神奈川大学の経済学部をご退職されるに当たって伝えておきたい、あるいは、これだけは言っておきたいということを、ぜひ。

西川登先生のこと

【田中】 ないですよ、そんなのは。(笑) そんなも

のはありませんけれども、できたら最後には、先生方から最近の研究の状況なんかを、あるいは仕事の状況なんかを皆さんに話してもらったほうがいいと思うんですが、私自身は神奈川大学の20年間すごく環境のいいところで仕事をさせてもらったので、すごく感謝しているんですよ。

私がこの大学に来たのは西川登先生が体調がどうもよくない、病気だったというのもあって、健康だけは取り柄の私を呼んだというのが実情です。私に来たのは津守常弘先生と同じ年、その前の年には戸田先生が着任されているんです。3人の新人がほぼ同じ時期に来たんですね。私は、同じ会計という研究領域にいるんだからできるだけ仲よくしたいという思いもあり、また1人の力よりも、4人5人の力を合わせたほうがいろいろな仕事ができるという思いがあったので、先生方にもいろいろご無理をお願いして、随分たくさん本を一緒に出させてもらったりしたんですね。先生方と一緒に10冊ぐらいは出しましたよね。

その中で困ったのは、本を書くたびにいつも西川先生がいない。いつも体調の悪いときに仕事が回ってきて、西川先生に仕事を頼もうとするときには、体調不良でお休みしているということが多かったんです。幸いにして1回だけ、西川先生が復帰されたときに『通説で学ぶ財務諸表論』（税務経理協会）を書くタイミングがちょうどよかったので書いてもらったことがありました。

残念なことに、西川先生はほとんど最近大学にいらしていないので、逆にいうと、私はいる価値があったなと思っているんですよ。西川先生は自分で言っていましたから、私、体調が悪いので、元気な田中に来てほしいって。西川先生の補完は一応できたんじゃないでしょうか。西川先生には、早く元気になって頂きたいですね。

西川先生の発想にもあるんでしょうけれども、私たちはお互いに科目を交換できるぐらいに担当科目をオーバーラップしてやってきましたよね。ですから、今でいうと、国際会計論と連結財務諸表論の担当者をぱっと入れ替えても全然問題ない。国際会計論なら岡村先生でも奥山先生でも戸田先生でも、私でも担当できる。岡村先生の財務会計論と私の現代

会計学の担当をぱっと入れ替えても全然問題ない。管理会計と経営分析を入れ替えても何とかなる、経営分析なら戸田先生に頼むこともできます。お互いに持っている科目を交換してもできるぐらいに範囲が、お互いに研究領域が広まったのはすごくよかったんじゃないかなと思うんですよ。

そういうことからいうと、教科書を書いてくれて出版社から頼まれたときに、会計グループでぱっと引き受けられる体制にいたんだと思います。その点ではすごくよかったなと思って、感謝の言葉を述べさせていただきたい。(笑)

【岡村】むしろこちらがお礼の言葉を。

それぞれの「宿題」

【田中】ありがとうございました。私から先生方に聞きたいのは、今、何をしているか。最近の研究。特に岡村先生がサバティカルの間に何をやっているかは、大体おおよそ皆さん見当はついているんでしょうけれども、ご本人の口からこういうことを今やっていて、近々こういうことになりそうだという話を聞きたいし…。

【岡村】いやいや、ちょっと座談会の趣旨が外れて…。(笑)

【田中】とんでもないです。

【岡村】これは別のときに。(笑)

【田中】岡村先生、ぜひ話してください。

【岡村】サバティカルで現実から離れているような感じですから。(笑)今、非営利会計に興味を持っています。NPOの会計基準をつくるときに一緒にメンバーで、実際にNPOの小さいところからいろいろな話を聞いたり、ちょうど戸田先生が農業会計でやっているような経験をNPOで経験しました。実はモデル別というのは、NPO会計基準の中でそういうモデルを設定しているんですよ。ごく小さなNPOは現金出納帳でいいわけですよ。そういうNPOも基準の中で盛り込めるようにし、少し規模が大きくなったところは利害関係者が出てまいりますから、少し報告ができるような体制。大規模なNPOはいろいろな申請業務もありますから、公益法人と近いような会計法を取るとか、そういうモデル別でやったわけですね。それがうまく今、機能し

ておりまして、NPOについては引き続き会計基準の改正をするとか、そういうところにまた来ておりますので、勉強しています。

【田中】その研究会やなんかには税理士なんかも入っていますか。

【岡村】税理士はいます。NPO関係を専門にやっている税理士ですから、むしろそういう非営利の人たちというのは燃えているんですよ。金もうけじゃないから。NPOをいくら支援したって、金もうけにならない。そういう点ではすごくいい雰囲気です。

【田中】NPOの経理や税務を頼むと税理士の先生って、ほとんどやったことがないからって断ってくるんですよ。でも、こっちは関係するNPOがあるじゃないですか。税理士に付いてもらいたいと思うんだけど、NPOは勉強したことがないからって断られる。勉強しろよ、この機会にって思いますね。

【岡村】なかなか付いてくれないし、会計基準も読んでくれないので困っちゃうんですけど。

それからもう1つは非営利の関係では、県の公益認定の委員をやっていますので、そこでいろいろなケースを知ることができて、これは非公開のものですから、公開できないんですけども、そこで多くの事例を見ますと、公益法人と言われているところでも、いろいろなタイプがありまして、例えばその中では墓園の経営をやっている公益法人もあるわけですね。そういう法人の経理の内容まで見ることができるので、そこから現実を知って、公益法人に関する会計というのは、どうあるべきかなということ今考えているところです。

【田中】応用編なんですよ。学者はこの年になったら、応用編をいろいろ解かなければいけない。

【岡村】非営利を手がけたのは1990年代の中ぐらいですけども、ちょっとやってみませんかと話がかかってきて、それがきっかけになって、軒先を貸したところが母屋を取られそうになっているというわけです。(笑)企業会計も勉強していますけれども。そういう状況です。サバティカルが終わったときに、どういう成果が出せるかはちょっとまだお話ししないほうがいいかなという。

【田中】 後で、それでは聞きますので。オフレコのと
きに。(笑)

【岡村】 まあ、そんな状況です。

【田中】 お2人の先生もどうぞ。

【奥山】 私は教授の就任のときに、田中先生からこ
れまでの研究をまとめるようにということと言われて、
気にはなっているんですけども、そのままず
るずると今日になってしまって、先生が在職されて
いる間にまとめられずに申し訳ないと思っている
ところです。

でも一応、今年は少し今までのような雑用に取り
られる時間が減っていますので、少しでも進められ
ばいいかなと思いつつ、いろいろ気が散っていて、
同時進行みたいな形でですけども、管理会計の領域
で気になるテーマが1つ2つありまして。

要するに、バリュレポーターティングということに
なるんですが、結局、非財務情報についての開示の
問題に関連して、それをちょっと管理会計の視点で
考えてみたいというテーマと、あとはちょっと古
い時代にさかのぼっての資金計算書について、これ
も資料がまだ全部集め切れていないんですけども、
それと今の時代とを結び付ける形で、キャッシ
ュフロー計算書とのつながりとか、その辺はドイツ
企業の実例ベースで、実証的にまとめたいなどは思
っていますけれども、これはまだ本当に取り掛かっ
て間もないので、もうちょっと時間がかかりそうで
すが、今の時点ではそんなところです。

【田中】 先生が最初のほうに言われた研究成果をま
とめるとするのは、ドイツ会計学の領域ですか。

【奥山】 そうです。法会計学というか。もともと在
外研究で出掛けていたときの指導教授がそういう分
野の人でしたので、それをベースにして、日本で言
う正規の簿記の諸原則につながるテーマです。それ
と、あとは現代のドイツの会計理論とのつながり
とか、その辺をちょっと、今まで幾つか論文で書いた
ものもありますので、それをまとめる形にしたいな
と考えています。

【田中】 ぜひやっていただきたいですね。実は先生
方がたくさんの方を持っておられるんですけども、
本としてまとめるときはボリュームの点で
いうと薄いほうがいいですね。それをどうしても学

位論文は厚くなきゃと思ったらとんでもない話なの
で、逆に200ページぐらいですっきりまとめたほう
が、論文としてみたら質が高いものができますから、
あまりボリュームを考えないで書いてもらいた
いなという、そのほうがいいんじゃないかなと思
いますね。

それと奥山先生にはぜひとも管理会計の本を書い
てほしいんですよ。この間横浜国大の溝口周二先生
と私を入れて3人で管理会計の本を書いたんですけ
れども、奥山先生が書いたところはすごくよく分か
るんです。この教材を使ったら、学生はすごくよく
分かって納得するだろうなと思いますので、あれを
ほかの領域にも少し広げて、ぜひとも1冊管理会計
の本を書いてもらいたいなと思います。

失礼な表現かもしれませんが、管理会計を専門と
している学者でない分だけ分かりやすいですよ。専
門家が書くとしても、難しくなりがちです。し
かも、最近の管理会計を専門とする学者は、昔の管
理会計をちょっとばかにしたところがあるじゃ
ないですか。昔の管理会計をばかにして、新しい管理
会計を紹介したって誰が読むんですか。経営者が使
う管理会計だとすると新しいも古いもなく、使える
かどうかが大事なんですよ。

そういう意味では、先生の書く事例なんかすごく
よく分かるので、あれをぜひ、最初のほう、あれを
3倍にすればいいだけです。(笑) 3倍も要ら
ない、2倍ぐらいでいいんじゃないですかね。管理
会計の教材を作ってほしいと思うので、ぜひ年内と
は言いませんから。戸田先生もいっぱいやっていま
すから、お互いいい意味の競争をしましょう。

【司会(戸田)】 私の編著で今まとめているものが、
来年(2014年)1月に出版されます。どうも金額が
5000円ぐらいになりそうで、こんなの誰が買うんだ
という感じですけど。(笑) でも、一応研究の到達
点として出版したいと思っています。

農業簿記、農業会計はやればやるほど、いろいろ
出てきますので、もう1つ、次は単著ぐらいを考え
ています。日本の農業の中にそもそも複式簿記が入
ってきたときの経緯って実はあまり知られていな
いんですけども、GHQの関与等、面白い点がある
なと思っていますので、歴史的にももう少し掘り下

げてみたいと思っています。それと、現代の農業会計というのは、農業ファンドのところの金融と絡めて、1つの展開があるんだろうなと思っておりますので、この点についても研究をやってみたいなと思っています。

やりたいことはまだまだ沢山ございます。例えば、20世紀から21世紀にかけて、ドイツ企業が次々と国際会計基準を適用していきますけれども、あれはなぜああいうふうになったのかというときに、国家戦略においても面白いところがあって、企業もそれをうまく使っていたんだと思います。それまでためてきた利益をIFRSという一応の口上の下に表に出していきながら株価を上げていくという、あの手法というのは、きれい事ではなくて、なかなかちょっと面白い部分だなというのもあったので、それもまとめたいと思っています。

記録と複式簿記というのを、全然違う点からもう1回、先生がさっきちょっと言われていましたけれども、アーティキュレーションとの関係の中でやりたいと考えています。今の新しい点から複式簿記論ってもう1回展開できるんじゃないかと思っていますので、今後とも先生のご意見・ご批判を頂きたいと考えています。

私事ですけども、ここ（神大）の会計学部門のスタッフになれてよかったと感謝しています。もちろん関東に来たので、いろいろな情報も取れるということもありましたけれども、当時20代後半で来て、田中先生を筆頭に西川先生もお元気だったときは、本当に皆さんものすごい生産性で、まずいなと思っていました。本当に。日々、実はプレッシャーで、一番年若い私が最も生産性が当時悪かったですから。やる気はあるんだけど何をすればいいのかよく分からない中で、在外研究に行って、やっと国際会計という研究対象が見つかった。やっているうちにだんだん、農業会計みたいな新しいテーマも出てくるようになりました。でも、あのプレッシャーがありがたかったというか、あのとき、まあいいか、死にもの狂いで研究しなくても許されるんだなと思わせてくれる先生は、会計の分野では誰もいなかったですね。私なんか怠け者なので。

【岡村】 それは戸田先生だけじゃないよ。みんなプ

レッシュャーですよ。

【司会（戸田）】 特にその中でも田中先生はすごかったんですけども。本当にやっぱりやらなければ、研究して論文を書かなければ地獄だなと思っていました。ゆっくりして、10年に1本ぐらい書けばいいかとは思わなかったですから。（笑）本当にここに來られてよかったかなと思っています。

学者の寿命

【田中】 最初にも言いましたが、『税経通信』という雑誌の連載の最初に、「学者の寿命—60歳限界説」って書いたんです。

【岡村】 もう過ぎちゃった。（笑）

【田中】 いやいや「説」ですから。該当しない方もたくさんいます。「60歳限界説」という話が私にとってみたらすごいプレッシャーだったんですよ。40過ぎたぐらいのころでしたか、何人もの先生にも言われたのは、「田中さん、書くなら今のうちだよ」って。「還暦を迎えたら、書きたくても書けないよ」。何人からも言われました。柴谷先生に言われ、飯野先生に言われ、会計学以外の先生からも言われ、もう本当に何人にも言われて、そう言われてから、あらためて学界を眺めてみると、還暦を過ぎても、とにかく書いているのは武田隆二先生とか末政芳信先生とか数えるほどしかない。関東にはほとんどいなかったですね。末政先生からは先日論文の抜刷を頂戴しました。見習いたいですね。

「60歳限界説」は結構当たっているんだと思って、それで私は60になるまでに一生懸命書こうと思ったんです。それが私が神奈川大学に来てからの、最初の十年間なんですよ。60になるまでには必死になって書かないといけないと思ってやってきたのですが、はっと気が付いてみたら、60過ぎても書く材料はあるんだと気がつきました。その先生方も言うんです、書くことは頭にあるけれども、文章にできないって。時代は変わったなと思うんです。昔は原稿を鉛筆で書いて、赤を入れて清書して、植字してもらってまた赤を入れて、すごい大変な作業をしないとイケなかったですね。今はちょこちょこっとパソコンを打てば、文字になって出てくるじゃないですか。赤を入れるのも簡単ですし、ワードか何かで

データを出版社に送ればすぐに校正紙が戻ってきます。

そう思っていたら少し安心したのと、実をいうと、この連載は今月号で67回目なんです。月に1本の原稿を5年以上ずっと続けている理由は、連載だと書かなければいけないんです。オブリゲーション。毎月1本は書かなければいけないという義務があると、いつもアンテナを高くしているしかないんですよ。それで書き続けていると、いまだに筆が一応止まらないで済んできたのかなという思いがあるんですよ。1回筆を置いたら終わりだなという思いがあるから、無理でも連載を続けているという。それは、どんな仕事でも頼まれたら必ず引き受けてというのと似ているのかなと思いますね。

ただ、私、先生方がよくご存じのように遊び人ですから。とにかく朝起きたら、テニスコートに行つて、テニスをやって一汗かいてからでないとは絶対に仕事をしないし、太陽が出ているうちは机に向かわない主義ですから。とにかく遊んで、遊んで、ゴルフに行つて、スキーに行つて、もうやる事がなくなったというぐらいまで遊ぶと、プレッシャーが思い切りかかるんですよ。あのプレッシャーが大事なのかなと思ってですね。

【司会（戸田）】 先生のモットーの「遊んだ分だけ仕事をする」。(笑)

【田中】 だから、遊ばなければいけないという大義名分を立てる。(笑) これで2時間。

【司会（戸田）】 そうですね。ちょうど2時間ぐらいですね。

【田中】 山口先生、最後までお付き合いいただきありがとうございます。

【山口】 とんでもない。僕、全く門外漢なものですから、切りのいいところで中座する予定だったんですけど、あまりにも話が面白いので、最後までいてしまいました。

【田中】 お忙しいときに時間を頂戴して申し訳ないです。

【山口】 非常に面白い読み物になるんじゃないかと思えます。

【田中】 ありがとうございます。

【山口】 ありがとうございます。

【田中】 会計学というのは必ずしも技術じゃないということをご理解いただけたようでしたらうれしいですね。

【山口】 思想だなと思いましたね。お聞きして。あと田中先生と言えば、年に何冊も本を出される、論文の数は数えれば切りがないというので、先ほど戸田先生もおっしゃっていましたが、今日はその秘密の一端をお聞きすることができました。

【田中】 ありがとうございます。

【司会（戸田）】 どうもありがとうございました。(終了)